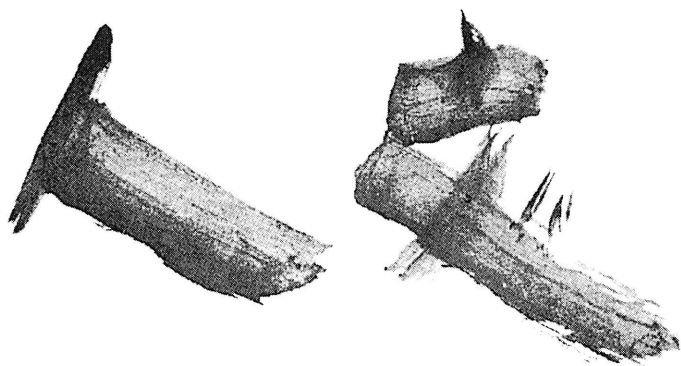




第六号



2014

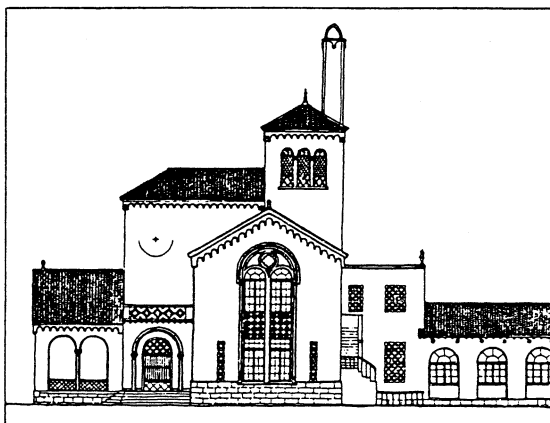
京都大学人文科学研究所

ISSN 0389-147X

人 文 第 六 号

2013年4月—2014年3月

も く じ



随想

捨てる捨てない——研究室の雑物整理

高田 時雄

科学に編みこまれて

瀬戸口明久

講演

夏期公開講座

都市の生活と文化

歴史都市と修学旅行——奈良・京都・伊勢の近代

高木 博志

城下町大坂——情報を発信する町人——

岩城 卓二

『金瓶梅』挿図に描かれた生活空間

高井たかね

講演会ポスターギャラリー二〇一三

集報

共同研究の話題

東アジア伝統科学の「知」と「術」

鄭 宰相

いまここにあるということ

井波 陵一

研究班と読書会

石川 禎浩

所のうち・そと

ヘンリー・ミヤタケさんと日米戦争

竹沢 泰子

掃除のおじさん

藤原 辰史

現代中国センター配架図書に関する二、三の覚書

小野寺史郎

朝鮮民族運動史研究と野球

小野 容照

恋と戦争の外交術——オペレッタと第一次世界大戦——

小川佐和子

書いたもの一覧

捨てる捨てない

——研究室の雑物整理

高 田 時 雄

幸いに大學に職を得てから研究室というものを持った。寝ている時間を除けば、自分の家にいるよりも、研究室にいる時間のほうがずっと長いという生活を、思えばもう三十年以上續けてきたことになる。そのあいだ何度か研究室の引越をしたが、荷物の量は一向に減らない。捨てる努力をしてこなかった所爲なのは明かである。もともと荷物の大部分を占める書物や雑誌などは、増殖の速度に追いつかず、すぐに部屋が身動き出来ないくらいになるので、以前から定期的に別の場所に運んでいるが、つて完全にコントロール出来ていないとは言わないまでも、研究室に置いてあるものは一定の分量におさまっているのはまだしもある。

さてこうして退職となると、研究室を明け渡すのに、一切合切を運び出さねばならない。これまでも先輩諸兄が退職される折には、廊下に段ボールの山が築かれるのを何度も横目で見てきた。明日は我が身と思いながら眺めていたが、さていよいよ



自分の番になってみると、やはり大變は大變である。

重さと嵩とを考えると、最大の難關は當然ながら大量の書物の移動ということになるだろう。時間がかかるのと腰への負擔が大きいのを覺悟すれば、まずまず單純な作業である。箱詰めから先は引越業者がやってくれる。先日來ほちぼち書物の箱詰めを進めているので、だいたい目處が立つてきた。

長く研究室で生活していると、書物以外に色々雑多なものが溜まつてくるのは致し方ない。ほとんど使わない文房具がある。ホッチキスの針、紙を挟むクリップ、鉛筆、ボールペン、カラーマーカーなど、十年も二十年も引き出しに眠っていたものだ。大量の名刺がある、これは捨てずに取っておいたのが悪いのかもしれないが、あちこちからかき集めると相當な分量である。いささか特殊なものだと、學會に出るたびに用意してくれる名前プレートがある。プラスチック板のあいだに所屬と名前を書いてあり、首から掛ける例のやつである。これは何となく捨てるに忍びないので、持って歸ることにしていたら、その數が四、五十にもなつてしまっている。

文房具は状態の好いのを一定數選び出して、あとは捨てる。どうせ古いボールペンなどはたいいていインクが乾いて書けなくなっているから、決斷は早い。ゴミ袋に一直線である。鉛筆も黒いのも赤鉛筆、出来るだけ新品を選ぼう。赤鉛筆を削っても芯が折れない愛用の鉛筆削りは捨てられない。カラーマーカーというのはほとんど使ったことがないので、なぜこんなにある



のか不明だが、年度末の研究費の端數處理で溜まったのかもしれない。例の黒いクリップは商品名を知らなかったが、ターンクリップあるいはダブルクリップというのだそうで、ある時期から何でもこれを使うようになった。大小幾つもの種類があつて、再利用が効くので捨てずに取っておくものだから、引き出しの中にいやというほど溜まつている。ある程度は持つて行こうと思うが、使えるものをゴミにするのももったいない。誰かが使ってくれることを期待して、部屋に残していくことにしよう。

名刺は迷わず捨てることに決めていたが、ばらばら見ていると、大先輩や若死にした友人のものなどがあつて、ゴミ袋に直行というのも躊躇される。とはいえ一々見ている時間もないので、取り敢えず持つて行つて後で選ぶことにする。

寫眞が意外にたくさんあるのにはいささか驚いた。ほとんどみな人から貰つたものか、何かの記念寫眞の類である。この頃はデジタルになつていたので、ハードディスクに入れておけば嵩張らずに済む。とはいえ今でも學會の集合寫眞などはかならず大きくプリントしたものを呉れるから、増え方はずっと減つたが、少しは増え続けるわけだ。全部捨ててしまえと誰かが耳元で囁きそうな氣もするが、意を決してスキャンしてデジタル畫像で保存することにした。思いつきはいいが、所詮始めたのが遅かった。部屋の明け渡しまでに全部をスキャンするのはとても無理らしい。残りは持つて行かざるを得ない。退職後の仕事が増えた。



もう一つ厄介なのは手紙である。これは寫眞よりも分量が多い。これも寫眞と同じく、簡単な用事は電子メールで済ませる世の中になったので、一昔前に較べれば手紙のやりとりの機會は格段に減つたはずだ。といつてもこれまでに溜まつた分量は半端ではない。一體人様は手紙の處理をどうしているのか聞きたくなる。中國では有名人の書簡は生存中でもネットオークションに出現するくらいだから、捨てるのは惜しいという助平根性もある。ただこれまで整理していたわけではないので、この期に及んで一々選んでいられない。仕方がないから、まあ全部持つて行つて、これも退職後にゆつくり整理することにしよう。たかが雑多な物品である。それでも達人ならぬ身の、煩惱にわざわざされて優柔不斷、結局迷つたあげくに捨てるに捨てられず、時間だけ浪費することになる。決斷を先送りして、自分で今後の仕事を増やしている。まことに愚かというほかない。今後退職される諸兄には、早いうちに雑物の整理に心掛けることをお勧めしたい。もちろん普段から整理整頓を心掛けている方々はその限りではない。



科学に編み込まれて

瀬戸口 明久

出町柳から百万遍に抜ける通り沿いに、「やまちゅう」というお好み焼き屋がある。昨年四月に赴任して、この店の前を通るようになってから、しきりと十五年前のことを思い出す。場所が記憶を呼び起こし、過去と現在がつながったかのような奇妙な感覚がわき上がってくる。

そのころ私は、理学部を卒業して文学部に移り、科学史を学びはじめていた。とは言っても文学部には学部生の居場所はなく、Fという友人がいた植物学教室の研究室に入り浸っていた。そこで出会った先輩のAさんが、ハートルとクラークの集団遺伝学のテキストを読む自主ゼミに誘ってくれた。理学部ではろくに勉強しなかった私にとって、ここは初めて進化生物学の理論を学ぶ場所だった。その読書会のあと、よく利用したのが「やまちゅう」だったのである。

この読書会に出ていた一、二年ほどは、私の長い京都生活のなかで、もっとも濃密な数年間だったと思う。決して充実した研究生活を過ごしていたわけではない。むしろ逆である。文学



部で科学革命や論理学を学ぶだけでは、私は何か満たされなかったのだろう。週に数日は、夕方になると植物学教室のラボを訪れ、そこにいる人たちと過ごしていた。気が向いたら、吉田神社下の焼き鳥屋に飲みに行く。だいたい教員の悪口にはじまり、研究の愚痴が続き、これからの生物学というような大きな話に移っていく。そして午前二時を回ると、Fが「もう革命しかないんや！」と叫び出し、そろそろお開きになようかということになる。

そんな日々が数年続き、一人、また一人と大学を去って行く。とても面倒見がよく、休日になると植物採集に連れて行ってくれた先輩は、いまでは環境アセスメントなどの生態調査を請け負う仕事に就いている。登校拒否になって長らく引きこもっていた友人は、紆余曲折を経て高校の生物の教員になった。別の友人は肌合わない実験などには早々と見切りをつけ、電子顕微鏡のメーカーに就職した。このように友人たちの多くは、大学を去って研究という意味での科学から離れてしまったが、何らかの形で科学に関わって生きている。

そして誰もいなくなった大学に、私は帰ってきた。長い時間が経ったこと、私自身の立場が変わったということもあるのだろう。母校にいながら未知の場所にいるかのような、おかしな感覚をぬぐい去ることができない。ノーベル賞学者が率いる巨大な研究所が設立され、実用と直結した夢のような科学の未来像が語られている。グローバルな競争力を持つ研究成果を出す



ことが求められ、そのための組織改革にすべての人が右往左往している。そして新しい時代を切り開く、社会的なインパクトのある知識を生み出す場所としての大学が模索されている。ここで語られている科学のあり方は、私が経験してきたものとは、あまりにもかけ離れている。

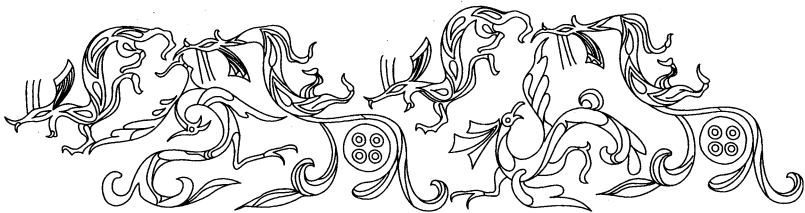
私のなかのイメージでは、大学は必ずしも科学の中心に位置してはいない。一人一人の人生が長い糸のようなものだとするならば、一本一本がゆるやかに編み込まれ、大きな網としての科学技術社会がつくりあげられている。その編み目に組み込まれているのは、大学で論文生産に勤しむ科学者だけではない。企業でも高校でも役所でも、あらゆるところで一人一人が編み込まれ、それぞれの仕事を全うすることによって、広大な科学技術社会が維持されている。こうした無数の糸が一瞬だけ束のように縛りあげられるボトルネックが、人々が数年間をとみに過ぐす大学という場所ではなかったか。

「やまちゅう」の前を通るたびにいつも思い出すのは、編み込まれることもなく、断ち切られてしまった糸のことである。読書会からしばらくして、Aさんはフィールド調査中の事故で帰らぬ人となった。そのあとFも、指導教員と大げんかをして大学を去り、実家に帰って行った。しばらくは長大なメールがときどき送られてきたが、少しずつ短くなり、ついには返信も途切れがちになっていった。

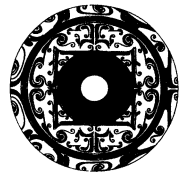
私自身もまた、科学の編み目から抜け落ちてきた一人かも知



れない。最近、理学部の同期と再会する機会が多くなった。その中の一人から、「君は長いこと行方不明やってんけどなあ」と笑われた。嬉しい再会は、科学技術社会の編み目のどこかにもう一度、組み直されるということでもある。網のなかを走り巡る糸のように、再び科学者の周辺に編み込まれていく。そこから見えてくる科学のあり方は、これからの私の歴史の語りにも反映されて行くに違いない。それは決して、時代の先端を切り開く科学研究などではないはずである。



講演



夏期公開講座

歴史都市と修学旅行

——奈良・京都・伊勢の近代

高木 博志

「神武創業」を視覚化する神武天皇陵・橿原神宮、あるいは飛鳥・白鳳・天平文化を体现する古都奈良、平安貴族や桃山時代の文化を特色とし東京遷都まで天皇の居所であった京都御所を有する古都京都、皇祖天照大神を祀る伊勢神宮内宮のある神都伊勢、西日本の名教的史蹟（名分論を重んじ国民道徳に資する史蹟）

の横綱である「太平記」の南朝史蹟群、皇居や博物館・美術館が集まり政治・経済の中心である帝都東京。こうした都市の歴史性を体现する場をめぐる修学旅行が成立した世紀転換期の奈良女子高等師範学校（以下、奈良女高師）の事例をもとに、その歴史的意義を考えたい。修学旅行の目的地の多くが近代に整備されたものであり、伊勢から奈良・京都をめぐる中等教育から小学生までがたどる道筋は、実は代替わりや結婚の奉告に天皇や皇族がめぐる皇室の聖地をめぐるルートでもあった。

奈良女高師は、東京の女子高等師範学校に続く二番目の女高師として一九〇八年に開校した。一九一一年の第二回の第二回開校記念日に、野尻精一校長が述べた式辞の一節では、「奈良ノ地ノ最モ適当ナルコト。

奈良ハ伊勢大廟、神武帝陵、京都ニ近ク、且ツ平安以前ノ帝都タリシ土地ニシテ我国往事ノ文化、今ニ見ルベキモノアリ、我等ハ宜シク昔時ヲ追憶シ、現代社会ノ大勢ニ従ヒマスマス勉メザルベカラズ」と奈良の皇室と関わった歴史性の立地を誇った。

近代の修学旅行の歴史をふりかえってみると、身体鍛練を目的とした一八八〇〜九〇年代から、一八九九年の学生の団体旅行への割引を契機とする修学旅行の広まりを一つの契機として、「直観教授」の方法論も

加わって史跡名勝などへの歴史や地理的な実地研修に重きが置かれるように変化した。実地研修へと重点が移行する頃に、同時に奈良・京都・伊勢などの古都・神都などの皇室とゆかりのある聖地への修学という目的が、日露戦後の国民道徳論の隆盛とともに広がってきた。

奈良女高師の卒業生は各府県の女子師範学校や高等女学校の教員となり、さらに女学校などの卒業生が小学生を引率することになる。したがって奈良女高師において、近代の修学旅行をめぐる教学や文化の体系を創り出すことになった。

そこでは、近代の鉄道や船舶などを時間厳守で利用することや、授業と修学旅行の教学を連動させること、史跡・名勝ではきつちりとした文献にもとづいて学習すること、とりわけ古典文学の素養を深めること、文系・理系の多様な専攻に合致した目的地（大学各学部・西陣織・清水焼・軍隊など）、皇室の聖地（京都御所・伊勢神宮・桃山御陵・平安神宮・橿原神宮など）や名教的史跡（南朝史蹟・赤穂浪士旧跡）を重視すること、が教え込まれた。

裾野への広がりといえば、たとえば一九一一年に報告された、京都市の弥栄尋常小学校（東山区）では、「教授訓練の二方面の目的を有し、一は地理、歴史、

理科等に関する実地の踏査及採集、一は体力の尤進と精神的努力の奮起に勉むること」を修学旅行の目的とし、「春秋二期とし」、二学年は銀閣寺方面の原野山林。三、四学年は津又は奈良方面。五、六学年は神戸、伊勢方面、奈良、大阪、和歌山、舞鶴」などめぐっていた。

奈良女高師の文系では、史跡名勝を訪ね古典文学との関わりや歴史的な事跡を訪ねるという点で、奈良・京都・伊勢・南朝史蹟などは、その教学の課題と修学旅行先が一致していた。それに対して理系では教学との関わりで、産業や科学技術の先端を習得することがまず重要であったが、建前としては国民道徳に資する皇室関連の聖地をめぐることも目的として掲げられた。それは文理共通で一学年から橿原神宮や神武陵を参拝することや、第二学年文理共通の伊勢神宮参拝にまずあらわれた。そして京都や大阪や東京において、理系もその都市の歴史性を体现する史跡名所を訪ねたし、第四学年でも文理各部が東京の皇居や京都御所を拝観した。

こうした皇室の聖地を修学旅行でめぐることが、女高師のような高等教育機関よりもさらに広い裾野を形成する尋常小学校では、最終学年の一度きりの修学旅行において、第一義的に重視された。明治末期には京

都市内の小学校では、伊勢修学旅行が一般化するし、アジア太平洋戦争時には皇室の聖地をめぐる「敬神」の意義は強調されてゆく。さらにツーリズムの社会への浸透という面を考えると、修学旅行により一般家庭内で親よりもまず児童から旅行の文化を経験する。それが戦後につながる旅行と大衆社会のありようを準備することになった。

(参考、高木博志編『近代日本の歴史都市——古都と城下町』思文閣出版、二〇一三年)

城下町大坂

——情報を発信する町人——

岩 城 卓 二

元治元年（一八六四）七月十九日早朝、長州藩勢は京都市中に攻め入り、迎え撃つ会津・薩摩藩兵等との間で激しい戦闘を繰り広げた。幕末史でよく知られる禁門の変である。

禁門の変は、多くの武士にとって初めての戦場であった。戦闘の主役は騎馬ではなく爆裂弾を放つ大筒であり、街路での遭遇戦であった。今日限りの命と覚悟しながらも死への恐怖から、敵兵が逃げ込んだ町屋にも容赦なく放火し、敵方の武器・兵糧の運搬を手伝う非戦闘員にも襲いかかった。市民は戦火の中をただただ逃げ惑うだけで、悲鳴が飴し、薄水を踏むような数日間を送ることになった。そして、戦火の後の市中には死骸が散乱し、異臭が鼻を突いた。市中で三万戸が焼失したという。

この禁門の変は政治史として脚光を浴びることが多いが、社会史的にも重大事件であった。それは大坂夏

の陣以来、実に二五〇年ぶりの市街戦だったからである。豊臣城下町大坂を戦場とする夏の陣で終止符を打たれた戦争の時代が、京都を発火点に再び始まるのか「平和」を当たり前のように享受してきた人々に、不安と恐怖が広がった。

さて、変の報は、たちまちに全国を駆け巡る。石見国邇摩郡の幕府陣屋町大森（島根県大田市）の商人熊谷家には、二十九日、知己の大坂町人大坂屋貞次郎より、変を知らせる手紙が届けられた。手紙は大坂屋も戦火の拡大に怯える変の翌日に認められたもので、京都の様子に加えて、厳戒態勢に入った大坂城の様子、幕府役人の動向、荷物をまとめて避難する市民のこと等々、京坂の世情が事細かに記されていた。第二報となる二十五日付の手紙では、平穩を取り戻しつつある京坂の様子、米穀市場を左右する長州藩蔵米の処理、戦火拡大の懸念材料となっていた長州藩蔵屋敷の処分等々、広く商売を手がける熊谷家の関心が高い重要情報が報知された。熊谷家は、複数のルートから変の情報を入手していたが、大坂屋の手紙は、現場からの手紙であり、他からは知り得ない第一級の情報に溢れていた。

江戸時代は、全国各地どこでも不自由なく、手紙が郵送されていたわけではない。石見銀山の町場として

賑わい、幕府代官所が置かれるというものの、小都市大森には、定期的な遠隔地向け民間飛脚便は開通されていなかった。そのため大坂・江戸への手紙の郵送は、両方面に向かう知人・旅人たちに託するのが一般的で、郵送途中のトラブルによって届けられないというリスクも抱えていた。しかし、熊谷家と大坂屋は元治元年の一年間、実に六〇通程度の手紙を定期的に遣り取りしていた。それらは私信で、もっぱら世情、大坂の金銀銭・米相場変動、各地の災害、幕府人事等々の情報交換であった。禁門の変の報も、その一つであった。政治の中心地として浮上する幕末期大坂の、しかも他者からは知り得ない類いの情報を定期的に報知してくれる大坂屋は、熊谷家にとって誠に大切な知人だったのである。

では、なぜ熊谷家と大坂屋は定期的に手紙を交換できたのだろうか。それは、大坂の幕府役所と大森代官所の間に設けられていた公的通信手段である御用便を利用していただけである。幕府は、全国を支配するため通信網を整備し、幕府と遠国役所の間では御用状によつて意思疎通が図られていた。熊谷家は大森で、大坂屋は大坂で、ともに幕府の公金を扱う掛屋を務めるという立場を利用して、御用便で遣り取りされる公文書に私信を同封させていたのである。

江戸時代の大坂は全国経済の動向を左右する経済拠点であると同時に、幕府の軍事拠点でもあった。大坂城は西国外様大名に睨みをきかせる将軍の直轄城であり、幕府の軍隊が駐屯していた。大坂はこの大坂城の城下町であり、経済・軍事において徳川の「平和」を維持するための重要都市であった。ゆえに大坂は、幕府第一級の情報が受信・発信される都市であり、江戸や全国の幕府役所への通信網が確立されていた。大坂は情報交換のハブだったのである。熊谷家は、この大坂の位置に目を付け、大森周辺の人々から預かった手紙を大坂屋宛の御用便に同封し、大坂屋を介して大坂周辺だけでなく、江戸や各地にも届けてもらっていた。同様に、大坂屋も石見方面の手紙を熊谷家に届けていた。石見大森と大坂の間には、熊谷家と大坂屋を核にした通信・情報網が築かれていたのである。そして、熊谷家は、大坂屋がもつ別の情報網ともつながり、巨大な通信・情報網を手に入っていた。

この通信・情報網では、正確な情報の報知が求められ、情報の確度について細心の注意が払われていた。それはほとんど会わない、あるいは一度も面識のない他者がつながる通信・情報網は、「信頼」によって支えられていたからである。ゆえに誤った情報を伝えて他者からの「信頼」を失えば、そこからの退場を余儀

なくされた。複数の通信・情報網が交差している一九世紀において、それは、あらゆる通信・情報網から排除されることにつながりかねなかった。そして、各人には「信頼」する人物かを見極める力が求められ、駆け引きも必要であった。相手の要求・心理を文字だけで読み取らなければならない手紙の遣り取りは、人々の政治的トレーニングの場となっていたのである。

このように通信・情報網が交差する一九世紀、大坂は情報を求める人々を吸引する都市であった。それは大坂が西国有事に備える大坂城の城下町であるという幕府の全国統治戦略と深く関わっていたのである。

『金瓶梅』挿図に描かれた生活空間

——テキストとの比較から

高井 たかね

『金瓶梅』はよく知られているとおり、明末に書かれた白話小説で、西門慶と彼をめぐる女性たちを中心に繰り広げられる物語である。この小説は事細かに性的描写があることで知られるが、同じく様々な生活習俗をも仔細に述べることから、生活関連の各分野では研究資料として利用されており、さらに崇禎年間に行った挿図の付いた本が刊行され、これには、たとえ写真のようにありのままでなくても、失われた過去の生活情景が描かれていて、やはり格好の研究材料とみこまれている。

舞台は北宋末、清河県（現山東省）という一地方都市に設定されているが、文中に現れる制度、風俗はおよそ北宋のものではなく、この小説が書かれた、あるいは挿図の描かれた明代の状況を反映しているのは自明のこととされている。住生活分野に関しても同様で、私の取り組む中国家具史に関する論考では、明清時代

を扱ったものを中心に、『金瓶梅』の文中の事例やその挿図が多く資料として使われているのが現状である。『金瓶梅』に限らず、文学作品の挿図は物語のある場面を絵でもって表現してあるもので、建物や家具、そのしつらえなどの研究において、こうした可視的な情報を提供する資料は実物資料とともに大変得がたい存在には違いない。しかし、あくまで物語自体がフィクションであるから、テキストの上でも挿図の上でも、完全な整合性を求めてはいけない。それでは挿図については、どこが実状やテキストの通りで、どこが違い、どういった描き方の傾向があるのか。

挿図へのテキストの反映状況を調べてみると、具体的には次のようなことが見てとれる。

1、建物内でおこなわれる場面の見せ方には、次のような手法が常見される。

(ア) 建物内の人物を、壁や簾などを省略することで画面上に見せる。

(イ) 前項と同じ効果を求め、文中では屋内での場面であっても、人物が屋外で活動しているものとして、あるいは建物前面の月台（テラス）上でおこなわれているように描く。

こうした手法、とくに(ア)については、日本の絵巻物にみられる屋根と天井を取り払って描く吹抜屋台との

対比から、大變興味を引かれる。絵を見る者に部屋の上方からのぞかせるのではなく、建物の前面斜め上方から内部が見えるように壁の方を取り払う、もしくは登場人物たちの方を、建物の前方へと連れ出してくるのである。

また、同じ目的によると考えられる例として、拔歩牀という、天蓋付きの牀（ベッド）の前に小部屋のような小廊部が付属する家具の描かれ方が挙げられよう。文中では「拔歩牀（白歩牀、八歩牀）」として現れるのであるが、挿絵では前面に小廊のない、より簡略な架子牀（天蓋付きベッド）でこれを表現しているのである。この種の牀は嘉靖末以降のほかの文献にも現れ、挿図の描かれた当時はそれなりに使われた品種のはずだが、『金瓶梅』に限らず挿絵版画中ではこの牀をほとんど見いだせない。これは次に述べるようになるべく簡略に表現するためもあるが、おそらくそれだけでなく、牀上の人物を見せるのに前廊部分が妨げになるからだろう。

2、建物、家具の形状に対する操作は、なにも内部の様子を見やすくするためだけではない。あくまで物語の理解を助ける挿図という性格上、あるいは木版画という表現手法からの要請により、当然ながらその表現はなるべく簡略に従うという傾向がある。

西門慶の第五の妾、潘金蓮が先夫の武大と住んでいた家を見てみると、連続する数枚の挿図上において、隣家との位置関係については整合性を取ろうとしている様子。しかし、文中ではその家屋を、中庭を取り囲んでできるブロックを二つ前後に並べた日字型平面をなし、その奥の中庭に面した棟が「楼（二階建て）」だとするにもかかわらず、これらはほぼ無視され、通りに面した棟が「楼」に描かれるのみである。かろうじて「楼」であることだけがテキストを反映するのだが、「楼上」、つまり二階の部屋は金蓮が武大を殺害する舞台であって、これが物語にとって重要な場面設定と考えたことから「楼」の要素だけは残されたのであるか。ここに限らず、文中で楼上が物語の舞台となる場合のみ挿図の建物も二層に描くといったことは、別の建物の場合にもみられ、物語の進行上必要な場合には、建物の表現もテキストに従おうとするようである。

3、以上の例をみれば、挿図上の建物や家具などは、特別な例外を除いて文中での描写や実際からかけ離れたものようである。しかし一方で、ストーリー上で重要な役割を担っているとは思えないような細部を忠実に描き込む例もある。

八仙卓というテーブルが現在でも使われているが、

これは一辺に二人ずつ着いて腰掛けられる方形の卓で、明代ではもっぱら宴飲に使ったことがわかつている。

この卓が挿図に描かれた例が二例あるのだが、画面上はいずれも方形のテーブルで、また卓の一辺には一人もしくは二人が着いており、二例ともに一辺に二人がけできそうなサイズにみえる。このことは、八仙卓の卓面の形、大きさとして他の資料から知られることといちおう一致する。

また、宴会でのしつらえの描き方にもテキストをなるべく忠実に写したとみえる例があり、そこでは卓の配列の仕方、そして出席者数と用意した卓の数から割り出すと、一卓に着いた人数までテキストと整合性がとれている。

こうした例は偶然の一致とも考えられるが、それでも挿図の下絵師が基本的にテキストの細部描写を顧みる気がない、あるいはそれを理解していないとみるのは誤りで、じつは、茶を出す、卓を出すといった、ほんの一句を挿図に表現している場合もあることから、テキストを反映する意思さえあればそれができ、直接ストーリーに関わらない細部まで表現する場合があるのも十分に知られる。画面上にみられるテキストから乖離した表現は、むしろ挿図の演出のため意図的になされたものであり、とくに建造物は場の背景になると

いう性格上、テキストの再現より画面上での効果が優先されがちで、省略、簡略化などの操作が施される、その上で、「二階建て」などといったテキストに現れる場面設定の要素が、必ずしも完全に正確ではなくても、何らかの形で添加されているのである。

『金瓶梅』の挿図をテキストと対照してみると、その生活空間の描写はこうした演出を経たものであるのがわかる。その手法を知ること、今度はこれを生活空間の歴史研究に利用するにあたっては、信に足る情報を飾にかけられるようになるだろう。あるいは挿図では正確に描かれなかった情報を、逆にある程度復元することも可能かもしれない。いずれにしても、図とテキストとの両方を必ずすりあわせて解釈する必要がある。

挿絵版画には、通常の絵画には描かれる機会が少ないさまざまな生活情景が描かれていて、ただ眺めているだけでも十分楽しめる。しかし、一見当時の生活を目の当たりに示してくれるようであって、その実、一枚の挿図上でも虚実が複雑に入り混じったやつかいな代物であった。そこに盛り込まれた豊富な情報を誤解なく読み解くためには、結局は労を惜しまず逐一精査するほかないらしい。



講演会
ポスターギャラリー
二〇一三

四月

アジアの過去と未来を語るシンポジウム

Jakarta's Past

Space, Ethnicity and Urban Development

【講演者・コーディネーター】
Kusno, Mahfud Rumiyaning (東京大学大学院総合文化研究科)
【司会】
Kusno, Mahfud Rumiyaning (東京大学大学院総合文化研究科)
【会場】
東京大学総合文化研究科 401号室
〒113-8671 東京都文京区本郷7-3-1
【日時】
2013年4月1日(土)
9:30 - 12:30
【会場】
東京大学総合文化研究科 401号室
〒113-8671 東京都文京区本郷7-3-1
http://www.jakarta.past.or.jp/kyoto2013/

【講演者】
大塚由美子 (東京大学大学院総合文化研究科)
【司会】
大塚由美子 (東京大学大学院総合文化研究科)
【会場】
東京大学総合文化研究科 401号室
〒113-8671 東京都文京区本郷7-3-1
【日時】
2013年4月1日(土)
9:30 - 12:30
【会場】
東京大学総合文化研究科 401号室
〒113-8671 東京都文京区本郷7-3-1
http://www.jakarta.past.or.jp/kyoto2013/

五月

人種「民族」と
ヒトの多様性

中等教育でまなぶ
「人種」「民族」

4月27日(土) 午後1時
日本学術会議 講堂

【講演者】
大塚由美子 (東京大学大学院総合文化研究科)
【司会】
大塚由美子 (東京大学大学院総合文化研究科)
【会場】
日本学術会議 講堂
〒100-0001 東京都千代田区千代田1-1-1
【日時】
2013年4月27日(土) 午後1時 - 午後3時
【入場料】
無料

文学カレッジ
いししんじ
三本の時間

いししんじ
いししんじ
いししんじ

【講演者】
大塚由美子 (東京大学大学院総合文化研究科)
【司会】
大塚由美子 (東京大学大学院総合文化研究科)
【会場】
東京大学総合文化研究科 401号室
〒113-8671 東京都文京区本郷7-3-1
【日時】
2013年4月27日(土) 午後1時 - 午後3時
【入場料】
無料

六月

KYOTO LECTURES

Tuesday, May 28th, 18:00h

Nissin Ozmagin
Stories for the Nation
Rewriting History in Manga

【講演者】
Nissin Ozmagin (東京大学大学院総合文化研究科)
【司会】
大塚由美子 (東京大学大学院総合文化研究科)
【会場】
東京大学総合文化研究科 401号室
〒113-8671 東京都文京区本郷7-3-1
【日時】
2013年5月28日(火) 午後6時 - 午後8時
【入場料】
無料

Crossing Boundaries
Art and History IV

【講演者】
大塚由美子 (東京大学大学院総合文化研究科)
【司会】
大塚由美子 (東京大学大学院総合文化研究科)
【会場】
東京大学総合文化研究科 401号室
〒113-8671 東京都文京区本郷7-3-1
【日時】
2013年5月28日(火) 午後6時 - 午後8時
【入場料】
無料



夏期公開講座 京都大学 人文科学研究所

都市の生活と文化

高井たかね
京都府立総合政策研究所
都市文化研究センター

出城車二
地下文化
地下文化研究センター

高木博志
京都府立総合政策研究所
都市文化研究センター

2013年7月13日(土) 13:00-17:00

京都大学人文科学研究所 共催公開講座

京都大学人文科学研究所 共催公開講座

京都大学人文科学研究所 共催公開講座

七月

2013 KYOTO LECTURES

Wednesday, June 26th, 18:00h

Rebecca Copeland
Kirino's Kojiki
Feminist Adaptation
in The Goddess
Chronicle

SPEAKER

Rebecca Copeland is a professor of Japanese Studies at Washington State University. She is the author of *Kirino's Kojiki: Feminist Adaptation in The Goddess Chronicle*. She has also published on the topic of gender and literature in Japan.

2013年6月26日(水) 18:00-19:00

京都大学人文科学研究所 共催公開講座

2013 KYOTO LECTURES

Wednesday, June 26th, 18:00h

モダン・ジャズの技法と論理

講師 ファリッパ・ストレンツ
作曲 小関 博
指揮 岡田 隆

2013年6月20日(木) 18:30-20:00

京都大学人文科学研究所 共催公開講座

高校生のための夏期セミナー

漢字文化への誘い

加の聖地によるこそ

2013年夏期セミナー(全)

第一 漢字の文化と歴史

第二 漢字の文化と歴史

第三 漢字の文化と歴史

第四 漢字の文化と歴史

第五 漢字の文化と歴史

第六 漢字の文化と歴史

第七 漢字の文化と歴史

第八 漢字の文化と歴史

第九 漢字の文化と歴史

第十 漢字の文化と歴史

第十一 漢字の文化と歴史

第十二 漢字の文化と歴史

第十三 漢字の文化と歴史

第十四 漢字の文化と歴史

第十五 漢字の文化と歴史

第十六 漢字の文化と歴史

第十七 漢字の文化と歴史

第十八 漢字の文化と歴史

第十九 漢字の文化と歴史

第二十 漢字の文化と歴史

第二十一 漢字の文化と歴史

第二十二 漢字の文化と歴史

第二十三 漢字の文化と歴史

第二十四 漢字の文化と歴史

第二十五 漢字の文化と歴史

第二十六 漢字の文化と歴史

第二十七 漢字の文化と歴史

第二十八 漢字の文化と歴史

第二十九 漢字の文化と歴史

第三十 漢字の文化と歴史

第三十一 漢字の文化と歴史

第三十二 漢字の文化と歴史

第三十三 漢字の文化と歴史

第三十四 漢字の文化と歴史

第三十五 漢字の文化と歴史

第三十六 漢字の文化と歴史

第三十七 漢字の文化と歴史

第三十八 漢字の文化と歴史

第三十九 漢字の文化と歴史

第四十 漢字の文化と歴史

第四十一 漢字の文化と歴史

第四十二 漢字の文化と歴史

第四十三 漢字の文化と歴史

第四十四 漢字の文化と歴史

第四十五 漢字の文化と歴史

第四十六 漢字の文化と歴史

第四十七 漢字の文化と歴史

第四十八 漢字の文化と歴史

第四十九 漢字の文化と歴史

第五十 漢字の文化と歴史

第五十一 漢字の文化と歴史

第五十二 漢字の文化と歴史

第五十三 漢字の文化と歴史

第五十四 漢字の文化と歴史

第五十五 漢字の文化と歴史

第五十六 漢字の文化と歴史

第五十七 漢字の文化と歴史

第五十八 漢字の文化と歴史

第五十九 漢字の文化と歴史

第六十 漢字の文化と歴史

第六十一 漢字の文化と歴史

第六十二 漢字の文化と歴史

第六十三 漢字の文化と歴史

第六十四 漢字の文化と歴史

第六十五 漢字の文化と歴史

第六十六 漢字の文化と歴史

第六十七 漢字の文化と歴史

第六十八 漢字の文化と歴史

第六十九 漢字の文化と歴史

第七十 漢字の文化と歴史

第七十一 漢字の文化と歴史

第七十二 漢字の文化と歴史

第七十三 漢字の文化と歴史

第七十四 漢字の文化と歴史

第七十五 漢字の文化と歴史

第七十六 漢字の文化と歴史

第七十七 漢字の文化と歴史

第七十八 漢字の文化と歴史

第七十九 漢字の文化と歴史

第八十 漢字の文化と歴史

第八十一 漢字の文化と歴史

第八十二 漢字の文化と歴史

第八十三 漢字の文化と歴史

第八十四 漢字の文化と歴史

第八十五 漢字の文化と歴史

第八十六 漢字の文化と歴史

第八十七 漢字の文化と歴史

第八十八 漢字の文化と歴史

第八十九 漢字の文化と歴史

第九十 漢字の文化と歴史

第九十一 漢字の文化と歴史

第九十二 漢字の文化と歴史

第九十三 漢字の文化と歴史

第九十四 漢字の文化と歴史

第九十五 漢字の文化と歴史

第九十六 漢字の文化と歴史

第九十七 漢字の文化と歴史

第九十八 漢字の文化と歴史

第九十九 漢字の文化と歴史

第一百 漢字の文化と歴史

八月

2013 KYOTO LECTURES

Tuesday, July 16th, 18:00h

Philip Flavin
The Laughter of Japanese
Avant-garde in the 60's

SPEAKER

Philip Flavin is a professor of Japanese Studies at Washington State University. He is the author of *The Laughter of Japanese Avant-garde in the 60's*. He has also published on the topic of Japanese literature and culture.

2013年7月16日(火) 18:00-19:00

京都大学人文科学研究所 共催公開講座

2013 KYOTO LECTURES

Tuesday, July 16th, 18:00h

公開シンポジウム ひまこりの現在・過去・未来

2013年7月16日(火) 18:30-20:00

京都大学人文科学研究所 共催公開講座

国際シンポジウム

グローバル化する思想・宗教の重層的接触と人文学の可能性

Multilayered Interaction and Religious Contents in a Globalized Context: Prospects for the Humanities

2013年9月21日(土) 13:30-18:00

2013年9月22日(日) 9:00-18:00

京都大学 人文科学研究所 共催公開講座

2013 KYOTO LECTURES

Wednesday, September 11th, 18:00h

The Hapa Project: Multiracial Identity Today

SPEAKER

The Hapa Project is a multimedia project that explores the experiences of multiracial individuals in contemporary society. It features a series of interviews with people of various ethnicities and backgrounds, as well as a series of photographs and videos.

2013年9月11日(水) 18:00-19:00

京都大学人文科学研究所 共催公開講座

2013 KYOTO LECTURES

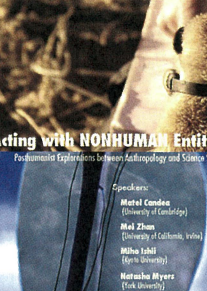
Wednesday, September 11th, 18:00h

公開シンポジウム 差異の表象と非表象

2013年9月11日(水) 18:30-20:00

京都大学人文科学研究所 共催公開講座

九月

[illegible][illegible]

International Symposium of Keio University
Saturday, September 24, 10:00-12:45

Acting with NONHUMAN Entities

Pharmaceutical Explanations between Anthropology and Science Studies

Speakers:

- Marcel Candea**
(University of Cambridge)
- Mark Zyglidopoulos**
(University of California, Irvine)
- Mihoko Ishii**
(Keio University)
- Matthias Meyer**
(York University)

[illegible]

日時開演「聖堂とフランドルをめぐって」 聖堂の再考」 主場

講演：アントワヌ・ド・ベック

Conférence de M. Antoine de Baecque

「L'Université Paris Ouest Nanterre La Défense」

「Le Terreur, une histoire décalquée」

「恐怖政治、兇れ狂う歴史—最近の研究動向から—」



日時：2015年10月23日（水） 午後5時から
会場：京大人文科学研究所 主会場 セミナール室2
会場はフランス語・通訳あり
・組織費なし。ただし会場費等のため、参加費の方針
要領に下記を掲載しております。ご検討くださいませいます。

〒108-8501 東京都港区赤坂 5-1-2 京大文研ビル5F
tel. 03-7727-9200 fax. 03-7727-9201
e-mail: info@kyodoinstitute.jp <http://www.kyodoinstitute.jp>

ドニ・ディドロ生誕三百周年記念講演会



Gianluigi Goggi
Professore all'università di Pisa
ジャンリュイ・ゴッジ ビサ大教授
Diderot et l'éloquence politique
ディドロと政治的雄弁

2013年9月27日(金) 15:30~18:30
京都大学人文科学研究所セミナー室 2
講義フランス語・通訳あり

主催：京都大学人文科学研究所東洋学講座「東洋とフランス文化」(「東洋」の領域)
講師：Goggi 氏 京都府立総合政策研究所 客員教授 京都府立大学文学部
文芸学系 intercultural@ipc.kyushu-u.ac.jp 090-703-0800

京都大学 人文科学研究所 第一・第二世界文化館公益財団法人 特別助成

報告

◎「第一次世界大戦の日本における多動機論を理由に反する審判」
ヤン・ファン・ネット（ネーデルラント 海牙大学） 田中芳子（ 京都大学）

コメンテーター：山田憲一（人文科学研究所）

日時：2013年11月15日（月） 18:00-12:00
場所：京都大学 人文科学研究所主館 第二ホール（一階）
参加費：無料

主催：京都大学 人文科学研究所 研究部「第一・第二世界文化館公益財団法人」
共催：山田憲一（京都大学）
連絡先：田中芳子（人文科学研究所）yoko.tanaka@kui.kyoto-u.ac.jp

[illegible][illegible]

**文化都市形成のダイナミズム
プレスラウ
ドレスデン
ライブツィヒ
から考える**

The Urban Dynamics of the German
City of Dresden: Presslau, Dresden and
the City of Leipzig

3月14日 13:30-17:00
京大文学部人文科学研究科 1号館101

参加費無料
定額通訳あり

【13:30-14:00】
定額通訳あり
【14:00-14:30】
定額通訳あり
【14:30-15:00】
定額通訳あり
【15:00-15:30】
定額通訳あり
【15:30-16:00】
定額通訳あり
【16:00-16:30】
定額通訳あり
【16:30-17:00】
定額通訳あり

ANNA SEIDEL MEMORIAL LECTURE
アンナ・ゼイドル記念講演

Translating Rituals:
How the Dedication of Merit Was Transmitted across Asia

Stephen F. Teiser
Princeton University
イェール大学

2014年2月26日(水) 14時30分
場所：京大文学部人文科学研究科 東アジア人文研究センター



第5回 台湾日本関係歴史資料の保存と利用
在台湾日本関係歴史資料の保存と利用

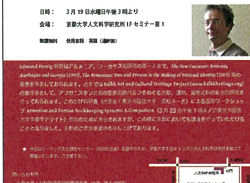
場所：京都大学文学部史料館 4階 大会議室
日時：2014年2月22日(土) 9:30-17:30

【9:30-10:00】 開会式(中絶) 台湾関係史料館にて
【10:00-10:30】 台湾関係史料館にて
【10:30-11:00】 台湾関係史料館にて
【11:00-11:30】 台湾関係史料館にて
【11:30-12:00】 台湾関係史料館にて
【12:00-12:30】 台湾関係史料館にて
【12:30-13:00】 台湾関係史料館にて
【13:00-13:30】 台湾関係史料館にて
【13:30-14:00】 台湾関係史料館にて
【14:00-14:30】 台湾関係史料館にて
【14:30-15:00】 台湾関係史料館にて
【15:00-15:30】 台湾関係史料館にて
【15:30-16:00】 台湾関係史料館にて
【16:00-16:30】 台湾関係史料館にて
【16:30-17:00】 台湾関係史料館にて
【17:00-17:30】 台湾関係史料館にて

The Balkh Art and Cultural Heritage Project
New Research in the Urban History and
Archaeology of Afghanistan and Central Asia

講演者：Edmond HERZOG 氏 (イェール大学東洋学教授)

日時：3月14日(水) 13:30-17:00
会場：京大文学部人文科学研究科 1号館101



木簡と
中国古代

2014年3月17日(日) 10:00-17:00
京大文学部人文科学研究科 東アジア人文研究センター




彙報

おくりもの

- 。菊地曉助教は二〇一三年日本建築学会著作賞を受賞（共同受賞）（二〇一三年五月三〇日）。
- 。菊地曉助教は第三八回日本生活学会今和次郎賞を受賞（共同受賞）（二〇一三年六月一日）。
- 。藤原辰史准教授は第一回河合隼雄学芸賞を受賞（二〇一三年七月五日）。

訃報

- 。竹内實名誉教授（九十歳）は、七月三十日逝去。

人のうごき

- 。山室信一教授（人文学研究部）を当研究所長に併任（四月一日）二〇一五年三月三十一日。
- 。岡田暁生准教授（人文学研究部）は、当研究所（人文学研究部）教授に昇任（四月一日付）。

- 。池田巧准教授（東方学研究部）は、当研究所（東方学研究部）教授に昇任（四月一日付）。

- 。富谷至教授（東方学研究部）を附属東アジア人文情報学研究センター長に併任（四月一日）二〇一五年三月三十一日）。

- 。石川禎浩准教授（附属現代中国研究センター）を附属現代中国研究センター長に併任（四月一日）二〇一五年三月三十一日）。

- 。藤原辰史を准教授（人文学研究部）に採用（四月一日付）。

- 。瀬戸口明久を准教授（人文学研究部）に採用（四月一日付）。

- 。永田知之を准教授（東方学研究部）に採用（四月一日付）。

- 。VITA, Silvio Italian School, East Asian Study Director は、特任教授（四月一日）二〇一四年三月三十一日）。

- 。藤本幸夫は、客員教授（文化研究創生研究部門、四月一日）二〇一四年三月

三十一日）。

- 。JACQUET, Benoit Marcel Maurice フランス国立極東学院京都支部長は、客員准教授（文化研究創成研究部門、四月一日）二〇一四年三月三十一日）。

- 。武上真理子人間文化研究機構地域研究推進センター研究員は、客員准教授（附属現代中国研究センター、四月一日）二〇一四年三月三十一日）。

- 。岩井茂樹教授は国際高等教育院に配置換えの上、当研究所（東方学研究部）を併任（五月一日付）。

- 。石川禎浩准教授（附属現代中国研究センター）は当研究所（附属現代中国研究センター）教授に昇任（八月一日付）。

- 。高田時雄教授（東方学研究部）は、退職（二〇一四年三月三十一日）。

- 。小野寺史郎助教（附属現代中国研究センター）は、辞任の上（二〇一四年三月三十一日付）、埼玉大学教養学部准教授就任。

海外での研究活動

- 。船山徹教授（東方学研究部）は、二〇

学講師

東アジアにおける禮制と芸術

(文化生成研究客員部門)

受入教員 富谷教授

期間 五月二七日～十一月二六日

。SCHMIDT, Jan ルール大学ポーフム

東アジア研究学部日本史学科専任講師

日本と東アジアにおける第一次世界大戦の研究

(文化連関研究客員部門)

受入教員 岡田教授

期間 七月二九日

二〇一四年一月二八日

。朱 玉麒 北京大学中国古代史研究中心教授

近代以来の日中交流における漢籍傳播の研究

(文化生成研究客員部門)

受入教員 高田教授

期間 十二月一日

二〇一四年五月三一日

。劉 恒武 寧波大学人文学院歴史系教授

前近代の日中交流史

(文化連関研究客員部門)

受入教員 富谷教授

期間 二〇一四年二月十五日

八月十四日

招へい外国人学者

。蔡 哲茂 台湾中央研究院歷史語言研究所研究員

人文科学研究所蔵甲骨調査

受入教員 浅原教授

期間 四月七日～四月二二日

。Blussé van Oud-Alblas Leonard Johan ライデン大学名誉教授

アジアの通商ネットワークと社会秩序

期間 五月十一日～五月三十日

受入教員 籠谷教授

。朴 薰 ソウル大学人文大学東洋史学科教授

明治維新と士大夫的政治文化

受入教員 山室教授

期間 九月一日

二〇一四年七月三一日

。王 宝平 浙江工商大学教授・院長

明治前期関西に來航した中国人と日本

外国人研究員

。MOORE, Oliver James ライデン大

一四年一月二日大阪発、スタンフォード大学人文理学大学院に於いて講義およびインド・中国における仏教の學術実践に関する仏教写本校訂に関する共同研究を行い、ライデン大学LIASに於いてインド・中国における仏教の學術と実践に関する宗教学に関するエリック・ツルヒヤー會議に参加、論文発表を行い、再びスタンフォード大学に於いて講義およびインド・中国における仏教の學術と実践に関する仏教写本校訂に関する共同研究を行い、三月二十七日帰国。

。村上衛准教授(東方学研究所)は、一部文部科学省科学研究費補助金により二〇一四年二月十七日大阪発、フランス国立社会科学高等研究院に於いて客員教授としてセミナーで報告を行い、英国国立公文書館に於いて「近代華南におけるヒトの移動に関する社会経済制度の研究」に関する史料収集を行い、三月二九日帰国。

期間 十月一日～二〇一四年二月十日

。蔡 鐵鷹 淮陰師範學院文學院教授
ファイルドワークに基づく《西遊記》

成立史の研究

受入教員 高田教授

期間 十月十日～十一月九日

。楊 孝鴻 上海財經大學准教授

中国漢代墓葬美術考古研究

受入教員 岡村教授

期間 十月二一日～

二〇一四年十月二十日

。李 成九 蔚山大學校教授

中国古代における楚の巫文化

受入教員 宮宅准教授

期間 二〇一四年二月七日～

二〇一五年一月三十日

。王 健 上海社会科学院歴史研究所副

研究員

邪教淫祠の破壊からみた明清時期中国

の国家権力と民間信仰の相互作用

受入教員 岩井教授

機関 二〇一四年三月一日～

二〇一四年八月三十一日

外国人共同研究者

。Scherrmann, Sylke Ulrike

青島旧蔵ドイツ語文獻中の法制關係資

料の調査

受入教員 岩井教授

期間 二〇一〇年五月一日～

二〇一四年三月三十一日（継続）

。朴 成鎬 韓國學中央研究院藏書閣・

韓國學基礎事業專任研究員

東アジア三国の王命（皇命）文書の比

較研究

受入研究員 矢木准教授

期間 五月一日～十一月三十日

。Hockelmann, Michael ミュンスター

大學博士研究員

李德裕『窮愁記』の文獻學的研究

受入教員 宮宅准教授

期間 五月一日～六月三十日

。POLETTI, Alessandro ロンビア

大學大学院博士課程

日本中世の地震認識と陰陽師

受入教員 岩城准教授

期間 六月十四日～八月二十九日

。GOGGI, Gianluigi Leone ピサ大學外

国語・外国文學学部教授

百科全書から共和主義的雄弁へ…ディ

ドロの哲學と政治

受入教員 王寺准教授

期間 九月十七日～九月三十日

。王 盈 復旦大學國際關係公共政策學

院博士課程後期

日本のアフリカ認識とアフリカ政策の

關連性

受入教員 山室教授

期間 十月一日～

二〇一四年一月三十一日

。朱 莉麗 復旦大學文史研究院助理研

究員

遣明使の記録の中の明代中国

受入教員 岩井教授

期間 十月一日～十一月三十日

。車 承棋 聖公會大學東アジア研究所

HK教授

資本、技術、生命…興南—水俣または

植民地／帝國企業都市の開放前後

受入教員 水野教授

期間 十二月一日～二月十二日

。POLFUSS, Jonas ミュンスター大學

非常勤務師

唐代の文学と法制

受入教員 富谷教授

期間 二〇一四年三月一日～

三月三十一日

外国人研究生

・KHARCHENKO, Anastasiia

日本の民族宗教

受入教員 石井准教授

期間 四月一日～

二〇一五年三月三十一日

東アジア人文情報学研究センター講習会

・二〇一三年度漢籍担当職員講習会（初級）

第一日（十月七日）

オリエンテーション 富谷 至

漢籍について（四部分類概説を含む）

カードの取り方―漢籍整理の実践土

口 史記

第二日（十月八日）

工具書について 高井 たかね

漢籍関連サイトの利用について

文学研究科閲覧掛 大西 賢人

実習を始めるにあたって

梶浦 晋

漢籍目録カード作成実習

第三日（十月九日）

目録検索とデータベース検索

安岡 孝一

漢籍データ入力実習（一）

第四日（十月十日）

和刻本について

文学研究科教授 宇佐美 文理

漢籍データ入力実習（二）

第五日（十月十一日）

朝鮮本について

矢木 毅

実習解説

土口 史記

情報交換

井波 陵一

・二〇一三年度漢籍担当職員講習会（中級）

第一日（十一月十一日）

オリエンテーション

富谷 至

経部について

叢書部について

古勝 隆一

叢書と漢籍データベース

安岡 孝一

第二日（十一月十二日）

史部について

宮宅 潔

漢籍データ入力実習（二）

第三日（十一月十三日）

子部について

武田 時昌

漢籍データ入力実習（二）

第四日（十一月十四日）

集部について

人間・環境学研究科教授

漢籍データ入力実習（三）

第五日（十一月十五日）

漢籍と情報処理

ウィツテルン・クリスティアン

実習解説

土口 史記

情報交換

井波 陵一

お客様

・四月五日 国立台湾大学文学院・院長

陳弱水（山室、高木、岩城が対応した）

・十月四日 フランス国立科学研究所

ター（CNRS）人文社会科学部門代

表 Patrick Bourdelais（大浦、井波、

王寺が対応した）

東アジア伝統科学の「知」と「術」

鄭 宰 相

二〇一〇年度から始まった共同研究班「術数学—中国の科学と占術」（班長…武田時昌教授）は、今春から最終年度を迎えることになる。私は前の研究班であった「陰陽五行のサイエンス」（二〇〇四年四月～二〇一〇年三月）に引き続き、科学史の研究班に参加させていただいている。

科学史研究班では多様な分野の専門家が集まり、『五行大義』をメインテキストとし、関連資料の会読が行われている。思想史を専攻した私にとっては、たとえば天文用語や本草などの、出典調べだけでは容易に理解できないものが多くあったが、会読の際に、各分野を専門とする班員の教示により、多くのことを知り得るようになった。共同研究を通じて班員たちは各分野の知識を互いに共有し、相当専門的な知識が班員の間では常識となっていく。留学に来る前に京大シノロジの力はどこから出るのか疑問だったが、共同研究班に参加してから、それは厳密な文献研究を基盤と

する「共同研究」にあることを思い知った。

科学史研究班の様々な活動のなかで、個人的に最も印象に残るのは、日韓科学史研究者の学術交流である。二〇〇六年九月に京都で開催された第六回日韓科学史セミナーの際には、発表資料の翻訳と通訳を担当することになったが、報告論文の数も多いうえに遅く届いた論文もあり、大会直前の何日かはほぼ毎日徹夜作業で翻訳原稿を作ることになった。翻訳スタッフの間では「大会開催日まで間に合わないかも」という緊張感が漂ったが、大会実行委員であった班長の武田先生は常に「そういうものは、なんとかなるようにできている」とおっしゃることであった。おそらく先生は、翻訳スタッフの負担感を最小限にしようとしたことだったであろうが、先生のお言葉と泰然自若な態度は、翻訳スタッフの緊張感をますます高め、「ここは先生のお言葉に甘えてはいけない」とかえって発憤させるものであった。果たして、まるで魔術のように大会の前に翻訳作業を無事に終えたことは、いまだに記憶に新しい。

二〇一〇年に「術数学」班が立ち上がった後にも日韓学術交流は活発に続けられた。折良く韓国でも近年独自の術数学の学会が組織されていて、京都産業大学に特別研究員として留学し、「術数学」研究班の班

員でもあった全勇勲氏（現韓国学中央研究院教授）の仲介で、日韓術数学研究者ネットワークが構築され、これをきっかけに京都とソウルにて三回にわたって国際ワークショップが開催された。

私自身も二〇一二年のソウル大学、二〇一三年の円光デジタル大学で開催されたワークショップで発表の機会をいただき、それぞれ中国古代の「太一」観念と天文学の関係、朝鮮後期の星図である「星辰図」について研究報告を行った。特に二〇一二年九月にフランス国立図書館で調査した「星辰図」は、学界に知られていない新しい天文資料である。朝鮮初期に作られた「天象列次分野之図」は、朝鮮の代表的な天文図とされ、これまで多くの研究がなされてきたが、それに対し、朝鮮後期に西洋天文学の影響を受けて制作された「渾天全図」などについての研究は皆無に近い。研究報告では、中国と朝鮮の天文図の比較分析を行い、「星辰図」が「渾天全図」の系統に属しながらも、またそれと違う特徴も持っていることを明らかにするとともに、朝鮮後期の天文図に対する研究の必要性を指摘した。天文曆学史に素人である私がこうした新たな発見ができたのは、術数学というコンセプトで科学文化を多角的に考察しようとする研究班に参加したからにちがいない。とりわけ、理論的に注目度が低いけれ

ども、世俗に広まる科学知識を探ろうとする研究アプローチには大いに啓発され、研究対象を限定しないで幅広い興味と視野を持つ必要性を感じたからこそ、そのようなお宝にめぐり逢えたのである。同様の見地から、諸子百家の思想史研究にもまだまだ開拓されていない領域があるように思われる。

近年、中国および東アジア科学史研究は、日本と韓国の研究者グループにおける「術数学」という学問分野の定立により、新たな転機を迎えている。こうした学界の動きとは別の形で、現場の術士側からの「術数学」への動きもある。最近韓国では、人相占いを素材とした漫画や映画が大ヒットし、人相についてのテレビドキュメンタリーも放送された。また韓国の有力新聞である朝鮮日報には、二〇〇四年九月から現在にいたるまではほぼ十年間、風水学や命理学、方外の士（術士）の逸話などを淡々とした筆致で語る「趙竜憲コラム」が連載されている。

趙竜憲氏が何年か前に「韓医学は市民権者、風水学は永住権者、四柱学は不法滞留者」といったように、これまで漢方医学（韓医学）は韓医科大学の中で教育・研究が行われていたが、これに対して風水学と四柱学は「学術」の対象として認められず、長い間、民間においてのみ伝授されてきた（朝鮮時代には風水学

と命理学を司る官庁があり、官吏も科擧によって選抜された。こうした状況の中で、いわゆる「未来予測学」に対する関心や社会的なニーズが高まり、この数年の間、大学の中に風水学と命理学（四柱推命）などの術数科目をカリキュラムとする学科がいくつも新設され、体系的な知識の伝授と学術研究が試みられている。世俗に伝わった「術」が自分自身を体系化するために、「学」の領域に踏み入ろうとしているのである。

これまで術数学研究班では、前近代における「世俗の知」と「学術の知」の交渉や「知」の往来的問題を、も研究テーマの一つとして抱えてきたが、今後は現代社会における様々な「術」と「学」の交渉やあり方、その意味についても学術的な探討を行っていただければと思うところである。

いまここにあるということ

井 波 陵 一

人文研の所蔵資料とじっくり向き合う共同研究班を

やろうと思い、石刻資料を選んでその検討に入ってからずいぶん時が流れた。あわせて有志による研究会では、線装本を中心とした所蔵漢籍を対象に、目録に記載された情報を詳細に検討している。死語と化した感のある「ガラス越しのキス」ではないが、多くの研究資料は、書籍も含めて、パソコンの画面上で確認・利用するのが当たり前となった今日、唇のやわらかさともではないものの、さらさら、あるいはザラザラした様々な紙の手触りを、そこに刷り込まれた文字の表情とともに楽しむ時間を、研究所内外の皆さんと共有できるのは幸せなことだと思う。

三世紀の三国時代から始めた石刻資料の検討は、現在、北魏を経て、六世紀の北斉まで進んでいる。私自身はこの時代の専門家でも何でもないが、それでもどこか惹かれてやまないのは、おそらくはるか昔、一回生の東洋史概説の授業で、吉川忠夫先生が、後に『侯景の乱始末記』（中公新書、一九七四年）としてまとめられたお話を、「大学の授業とはこういうものか」と感動しつつ、興味深く伺ったからだと思っている。「ハロクカンバツリョウ」という名前が懐かしい。

ところで、墓誌銘や建物の落成記念碑といった石刻資料には、書かれた内容をそのまま鵜呑みにしがたい側面がたしかに存在する。かつて「三国鼎立から統一

へ——史書と碑文をあわせ読む」というテーマで開催された第二回東京漢籍セミナー（二〇〇六年三月）の冒頭挨拶において、富谷至さんは、「有効性にかんして限界があり、石刻の歴史資料としての魅力は少ない」と述べられた。「自己宣伝の美辞麗句に充ちた刻文は、すべて歴史的事実として信用できるのかということ、また、個人の生涯とその業績を記す墓碑などは、文章が画一的となる傾向があり、その意味でも魅力に欠けた内容」だからである。事後のアンケートによれば、参加者の中には、ここまで聞いたところで憤然として席を立った慌て者がいたようだが、富谷さんの話はこう続いている。「ある時には誇張された内容、またある時には無味乾燥な記録、そこから歴史の真実を抽出して説明する、それが歴史研究者の腕の見せ所ではないだろうか」。

「無味乾燥な記録」と言えば、碑陰に羅列された関係者の氏名ほど、それにふさわしいものはないだろう。ローカルな碑文の裏側に、ローカルな肩書きを持った人々が数段にわたって刻まれている。同じ姓の人々がよく使われる、あるいは当時流行したと思われる名や字で並んでいる。その碑が立てられた時、除幕式に相当するような儀式を、関係者一同はどのように執り行ったのだろう。ひよっとしたら今と同じく、式の後に

予定されている宴会のことを気にして、「早く終わらないかな」と思いつつ、神妙な顔をしていたのではないだろうか（おそらく昔も今も変わらないはずである）。研究班では文字の確認を行う際、そうした人々の名前も一つ一つ丁寧に読み上げていった。およそ千五百年後に、遠く離れた島国で自分の名前が読み上げられることを、面映ゆく思ってくればありがたいのだが。

研究班自体に直接関わりはないものの、人文研の石刻資料を考えるに際して、忘れたい印象を残した出会いについて記しておきたい。

石刻資料の画像デジタル化を行うために、整理カードを順次めくる仕事をやっていた時、興味深い一枚に出会ったことがある。「藐姑射之山碑」（整理番号六二二、軸装）である。そのカードの最後の一行には、「田辺盛武中将寄贈」と記してあった。田辺氏（一八九九—一九四九）は、一九一〇年に陸軍士官学校を卒業した後、第四十一師団長（一九三九年十月）、北支那方面軍参謀長（一九四一年三月）、参謀次長兼兵站總監（同年十一月）、第二十五軍司令官（一九四三年四月）の任にあり、一九四九年七月、メダンにて刑死したという。「藐姑射之山碑」の所在地である臨汾府が日本軍の手に落ちたのは、一九三八年の二月か三月

だから、田辺氏の寄贈は山西省を拠点に活動した第四十一師団長に就任して以降のことと考えられるが、正確なところは分からない。それにしても、この寄贈はどういう意味を持つのだろうか。「田辺盛武中将寄贈」というのはあくまで形式的なものかも知れない。そうだとすれば、実際にはどのような経緯が存在したのだろうか。ざっと見ただけだが、軸そのものには寄贈されたことを示す痕跡は無かったように思う。いずれにしても、資料収集が行われた当時の時代状況を物語る一点であり、北中国の資料を比較的多く所蔵する人文研という存在、及びその中で仕事をするこの意味について、もっと大げさに言えば、学問や研究なるものの前提について、改めて考えさせられる一つのきっかけとなった。

研究班と読書会

石 川 禎 浩

人文研の中国近現代関連の共同研究は、中国古典学

のそれに比べれば、歴史・蓄積いずれも浅いとはいえ、その公式のスタートにあたる「辛亥革命の研究」班（一九六六年開始）からすでに半世紀近い歩みを刻んでいる。現在は、わたしが班長をつとめる「現代中国文化の深層構造」と村上衛班長の「近現代中国における社会経済制度の再編」がそれぞれ隔週金曜に例会を開催しており、人文研では中国近現代史関連の研究班が毎週あるという喜ばしい状況になっている。

「現代中国文化の深層構造」班の例会は、基本的に毎回一名の班員が一時間から一時間半の報告をし、その後に討議するという形式が一貫して続いているが、この一年半ほど、その例会のある金曜の午前に、班員の有志諸氏と中国近現代史にかんする日本語新刊を読み、それについて感想・評価を述べ合うという一種の読書会をあわせて開催してみた。背景は、近年における学術刊行物の出版点数増加である。研究成果の公表が強く推奨される昨今の風潮のなか、中国史にかぎらず、いわゆる研究書や論文集の刊行点数自体は、かなり増えている。かくて、知り合いや関連分野の研究者から寄贈本を受ける機会はとみに増えたが、一冊一冊丁寧に読み、感想をまじえて礼状を書くいとまなどは、悲しいことになくなってしまった。そこで、若手を中心に班員有志に呼びかけて、読書会（書評会）を定期

的に開催し、関連の新刊書を厳選してじっくりと読み、批評しあう場を設けることにしたのである。ひとの研究書をしっかりと読み、思索を重ね、時に引用資料を対照することを通じて、勉強や研究の仕方が若手にうまく伝われば——会読型の研究班と違い、発表型の研究班では、どうしてもこういうことがうまく共有・伝授されない——という思惑もあった。また、こうした機会を設ければ、自分自身の読書無精を少しは解消できるのでは、という目論見もあったことは言うまでもない。

二〇一二年一〇月に発足したこの読書会（各回二時間）でとりあげた最初の本は、「辛亥革命の研究」班（あるいはその前身であった『民報』輪読の研究会）以来、人文研の中国近代班と研究の歩みを共にされてきた小野信爾先生（花園大学名誉教授）が近ごろまとめた個人論集『青春群像 辛亥革命から五四運動へ』、呼びかけに応じて常時この会に参加してくれたのは十名ほどであった。これを六回かけて分担合評したあと、今年の三月にいったん終了するまで、とりあげた本は、ラナ・ミッター（吉澤誠一郎訳）『五四運動の残響』（二回）、石川禎浩・狭間直樹編『近代東アジアにおける翻訳概念の展開』（五回）、水羽信男『中国の愛国と民主——章乃器とその時代』（一回）、深町英夫『身体

を養う政治——中国国民党の新生活運動』（一回）、笹川裕史『中華人民共和国誕生の社会史』（一回）、家近亮子『蒋介石の外交戦略と日中戦争』（二回）、丸川知雄『現代中国経済』（一回）、長堀祐造『魯迅とトロツキー』（二回）の計九冊である。このうち、『近代東アジアにおける翻訳概念の展開』は現代中国研究センターの研究事業の論文集である。中国近代班では、以前は報告論文集が出ると、後継研究班でその合評会がなされるということもあったが、近ごろはいわば出しっぱなしが常態化しているため、この読書会を幸便と、五回にわたって収録論文すべてを批評することにした。この読書会にとって幸いだっただけなのは、その論文集をふくめて、せっかくの会だからということと著者に声をかけたところ、自宅療養中の小野先生を除き、すべての著者、訳者が遠路にもかかわらず、会に来て討論に加わってくれたことである。東京、広島などの研究者にとっては、京大人文研の研究会で自著が取り上げられ、関西の若手研究者に論評されるということは、光栄であると同時に、とても緊張することなのだろう。我々にとっても、直接に著者から見解や研究方法を聞けることで、得るところは甚だ大であった。時には、具体的な文献の引用を指して、資料の読み方がおかしいのではないか、その誤った読解から導き出され

る解釈も成り立たないのではないかと言った指摘がされることもあり、いわば真剣での渡り合い、なるほど京都の研究会は怖いと言う人たちの気持ちもむべなるかなと得心したのだった。

読書会が終われば、著者を囲んでなごやかに昼食、そのあとの午後は会場を現代中国共同研究室からセミナー室に移して、通常の研究班例会が五〜六時まで続く。読書会において下さった著者たちは、多くが午後の研究班にも引き続き参加してくれたが、それはそれで「音に聞く」人文研の共同研究班なるものを体験してもらうよい機会であったようだ。この読書会、一年半で九冊、計二十一回の開催だから、決して多くはない。また、通常の午後の研究班に加えて、午前も会、夕刻以降は毎回の懇親会と、金曜は隔週でなかなかハードな曜日となったことも確かである。だが、ひとくちに現代中国研究といっても、こんなことでもなければあまり熟読する機会のない文学や経済の研究書にも触れられ、大いに得をした気分になれたのだった。こんな仕掛け、また折りを見て試してみたいと思っている。



ヘンリー・ミヤタケさんと日米戦争

竹 沢 泰 子

シアトルに滞在中だった知人から、日系二世のヘンリー・ミヤタケさんに会ったと連絡があったのは、二年前のことだった。ヤスコを知っているか、と聞かれたいらしい。ヘンリー。生きていてくれたんだ。お互い引越しを重ね、連絡が途絶えたままだった。このところ、二世の旧友の計報が相次ぐなかで、その知らせを受けて胸が熱くなった。すぐに国際電話をかけ、元気な声を聞き、学会のある数ヶ月後に必ず会いに行くと英語で伝えた。

ヘンリー・ミヤタケは、シアトルにおける日系アメリカ人の強制立退き・強制収容に対する補償要求運動において、一九七〇年代、重要な役割を担った中心人物の一人である。当時、同じ日系社会のなかでも、集団補償案を強固に提唱するカリフォルニア拠点の日系団体と、個人補償案を訴えるシアトルのヘンリーらのグループとの間では熾烈な戦いが何年も繰り広げられていた。ヘンリーは、素人ながら、膨大な判例を調査

して個人補償の可能性を突き止めた筋金入りの闘士である。彼の案が後のアメリカ政府による個人補償と謝罪へとつながった。

ワシントン州の州花、石楠花が華麗な大輪で家々の庭先を飾る6月、ヘンリーは、シアトル・タコマ空港に年季の入ったトヨタで迎えに来てくれた。背の高い立派な体格であった彼は、大病を患ったらしく、大きく腰の曲がった、小さな痩せこけた老人になっていた。彼のお気に入りの回転寿司屋で、北西部名産のグイダック（みる貝）やサーモン巻きに舌鼓を打ちながら、私たちは再会を何度も喜び、時の経つのも忘れ、さまざまなことを語り合った。

ファストフードの寿司屋で三時間以上過ごしただろうか。彼の詳細で正確な記憶、瞬間毎の判断力は、外見とはまるでかけ離れたものだった。インタビューのために会っていたわけではなかったが、あまりに貴重な歴史証言たるべき話を始めたので、私は彼の許可を得て、ICレコーダーをまわし始めた。

日本で高視聴率を得たTVドラマ『九九年の愛（Japanese Americans）』（脚本、橋田壽賀子）は、日系人がどのように土地や資産を失ったか何も説明しておらず、誤解を与えかねないと辛口のコメントを吐いていた。戦前カリフォルニアで大農園主の日系人が

所有していた土地も、貸していた借地人らが意図的に納税を怠り、そのため土地は政府によって差し押さえられ、競売にかけられ、その結果、借地人らの狙い通りに廉価で土地は彼らの手に渡った。カリフォルニア米で有名な、あのコウダファミリーも、戦後アメリカ政府を相手取り訴訟を起こし、勝訴したもの、その補償金はほとんど弁護士の懐に入ってしまった。

次に話してくれたのは、日米戦争の折のアメリカによる暗号解読のやり方であった。ある日本政府関係者がワシントンDCの日本大使館に向かって暗号機を運搬する途中、カンザスシティで外出することがあった。その間、暗号機を金庫に入れたのだが、その後、その機械に得体の知れない異常を感じたという。後になってわかったことだが、知らない間に情報局の手によって金庫から暗号機が取り出され、解体され、解読された元のように金庫に戻されていたのである。戦後、ヘンリーが、他の日系人から聞いていたその話を情報局のアメリカ人に確認したところ、金庫から取り出したことを認めたという。

続いて、シアトル郊外のベインブリッジ・アイランドがなぜ全米で最初の日系人強制立ち退きの場所として指定されたのかについて語り始めた。定説では、軍事基地が存在し、その小規模な日系人人口からして、

試験的に行うのに適していたからだと言われている。ヘンリーによると、島では当時、材木業を営んでいた日系人たちが、切り株をダイナマイトで処分していた。そうした爆破技術を持つ日系人の存在を恐れた米軍がベインブリッジからの日系人の立ち退きを急いだのだろうという。

ヘンリーは、もうひとつ、書物に書かれていない話で私を驚かせた。彼がいうには、二世の多くは親の一世より早死にした。そして以下の話を始めた。アイダホ州のミニドカ収容所周辺では、労働力不足のため、逃亡の恐れのない日系人が夏になるとポテトの収穫に駆り出された。後で知ったことだが、農場の土壌は、近くの工場の廃棄物によって、放射能で汚染されていた。戦後、彼の仲間のうち四人が白血病で命を奪われたが、全員、実は、作業する際に手袋をはめていなかった。ヘンリーは人体への影響を恐れてゴム手袋をはめ、嘲笑的になったが、他の一部の二世もそれに倣い、手袋をはめて作業した。結局その手袋が生死を分かつことになったのだと彼は言う。一九八〇年代になって、アメリカ人の元農業労働者らがその会社を訴訟したが、それを知った時にはすでに手遅れだった。話を聞きながら、今は見えない、福島原発事故による数十年後の影響がいかなるものかと心に暗雲が立ちこ

めた。

これらの話が、専門家にはすでによく知られた話なのか、軍関係の公開資料と照合可能なのか、私には判断のすべがない。彼の研究者顔負けの緻密な調査や慎重な論理の組み立てから言えば、信憑性のない話だとは思えなかった。

日系アメリカ人の強制立退き・強制収容は今春で七周年を迎える。日米開戦とともに、人生を狂わされた日系アメリカ人。彼らの歴史については、すでに多くの書物やオーラルヒストリーが残されているように、実はまだ多くが、今は亡き人々とともに葬られたか、ヘンリーのような一握りの生存者の記憶にのみ刻まれているのかもしれない。

固辞する私をワシントン大学近くのホテルまで送ってくれた。次に会えるのはいつだろう。笑顔で運転席に戻るその背中に、彼が抱えてきた歳月の重さを感じずにはいられなかった。

掃除のおじさん

藤原辰史

京都に来るまえ、品川に四年ほど住んでいた。ゴミ焼却炉の煙突と、ダンプカーの煤煙と、光化学スモッグと、窓を開けると耳を刺激する騒音に囲まれた公共住宅が住まいであった。すぐ近くに大型道路も、新幹線も、京急も、モノレールも走っていて、粉塵と騒音の理由には事欠かない。バスで十分ほど離れた品川駅の朝は、高輪口と港南口を結ぶ通路を、黒い服を着たサラリーマンたちが十列縦隊くらいで、黙々と職場に向かう。

だが、晴れば雪のかぶった富士山を遠くに眺めることができる。最寄りの青物横丁駅の北側には下町が広がっていて、祭りの日は、品川生まれのお母さんも法被を着て屋台でお酒を飲む。商店街も元気で、いつも「つすよ」と語尾をつけるサラリーマンたちが昼や夜に胃袋を満たし、肝臓を痛めにやってくる。にぎわいを見せている。目黒川の河口付近にある近くの海上公園は、下水処理施設の近くに作られた公園である。

土日は、笑いながら走り回る子どもたちや、子どもの投げたボールをヨタヨタと追う眠たそうな顔のお父さんを見ることができる。ここには、少し息をつける穏やかさが残っていた。

同じことは、住環境にも言えた。十一階建てで、一五〇戸入居可能な公共住宅は、人の出入りが激しく、自治会もない。だが、それでも不思議な居心地の良さを醸し出していた。その最大の理由は「掃除のおじさん」である。岩手県出身の彼は毎朝八時頃に到着し、カラフルなバンダナを頭に巻き、青い作業服を着て、ゴミ捨て場にたまったゴミを整理する。それが終わると、台車に掃除用具と水の入った大きな焼酎ボトルと携帯ラジオを載せて、各階の共用通路を掃除する。デッキブラシで床をこする音が聞こえると、何か一日が始まったような清々しい気持ちになれる。チリひとつない掃除っぷりは本当に見事であった。

おじさんが住人たちに慕われていたのは、掃除中に岩手弁で声をかけてくれるからだではない。全員の名前と性格を知っていて、彼らや彼女らにあわせて話をしてくれるからだけでもない。実は、手先の器用なおじさんは、ごつごつした指を駆使し、ゴミ置き場でおもちゃを作ってくれたのである。各家から出された段ボールや発泡スチロールなどが、ゴミ置き場の机の

うえで恐竜になったり、車になったりするから、子どもの目は爛々としている。子どもたちの誕生日には手作りのケーキを持ってきてくれる。段ボールや色紙でできた紙製のケーキである。そのなかにおやつが入っていて、これまた子どもたちの心をわしづかみするのだ。

また、多摩川でつかまえたというカニやカメを、ゴミとして捨てられた発泡スチロールに入れて、ゴミ捨て場で子どもたちに見せてくれる。近くの虫かごには巨大なバッタが大量に詰められていて、「これはなに、おじさん」と聞いた女の子に「カニのエサ」とさわやかに答えるおじさんは、やはり素敵だった。いつもゴミ捨て場は綺麗で、塾と宿題に追われる子どもたちのオアシスであった。

ただし、おじさんの子どもたちに対する接し方は、結構クールであった。ダメなときはダメというし、よしよしと頭をなでたりしない。適度な距離感を保ちながら、子どもたちの要望に結構ドライに対応しているのだが、この距離感がまた子どもたちに心地よいらしかった。

私はゴミを捨てるとき、おじさんと会うことが多かった。おじさんは、よく私に昔話をしてくれた。岩手の貧しい農家に生まれた彼は様々な職歴を経てここに

やってきたのだが、詳細を語ることはここでは避ける。だが、掃除のおじさんが歩んできた道のりは日本戦後史そのものであり、その苦心の末に到達した境地が「掃除のおじさん」であったことを知った。震災のときに非常階段をつかって掲げた「ケツパレ、東北」という横断幕も、おじさんの人生からにじみ出た表現であった。

ある日、近所のお母さんから、「おじさんがどこかにいっちゃうらしいよ」という話が飛び込んできた。慌ててゴミ捨て場に行って彼に訊いたら、「話したら泣いちゃうから、こっそり出て行こうと思って」とうつぶいってしまった。どうやら、幹旋していた仲介業者が変わってしまった、おじさんも自然と契約解除になっ
てしまらしい。

普段おじさんに依存し、きちんとお礼もできなかった私たちは、作戦を練った。近所のお母さんは、東京に引っ越してきても微動だにしない関西弁で住宅管理会社に執拗に電話攻撃をつづけた。私たちは署名用紙を作り、それを全戸のポストに入れた。すぐに、たくさん
の署名用紙が戻ってきた。おじさんの似顔絵を書いた子どもの手紙もあったり、子どもがいないけれどおじさんの仕事ぶりには感謝しているという夫婦の言葉が添えられていたり、知らせを聞いた子どもたちが

泣きましたという言葉もあった。

すぐにそれをまとめて住宅管理公社に届けたところ、前向きな返事があった。おじさんの働きぶりからすればあいかわらず薄給であり、ここについてきちんと訴えられなかったことは大きな反省点であったが、こうして、おじさんは作業服を変えて再び働くことができるようになり、子どもたちから不安な表情が消えていった。

もちろん、署名運動のあいだ、近いうちに京都に引っ越すことはおじさんに言っていなかった。ある日思い切って打ち明けたら、やはりおじさんは私の前で泣いてしまった。

おじさんは、毎日たくさん
のゴミを捨て続ける私たちに一度も「こんなものまだ使えるものを捨てるの、もったいないね」とは言わなかった。ただ、黙々と、家庭で分別されたはずのゴミをさらに分別し、そのうち再利用できるものをおもちやや掃除道具に変えていった。だから、おじさんに面倒をみてもらっていたのは、実は大人たちだったのかもしれない。すくなくともおじさんの子どもぐら
いの年齢であるはずの私は、おじさんのカッターナイフをもつ指と、岩手弁で繰り広げられる昔話に、童心に帰っていたことを告白しなければなら
ないだろう。

現代中国研究センター配架図書 に関する二、三の覚書

小野寺 史 郎

二〇〇八年四月に人文科学研究所附属現代中国研究センターに助教として着任し、二〇一四年三月をもって転出することとなった。したがってこの原稿を書いている時点では私は「所のうち」の人間なのだが、『人文』刊行の時点ではすでに「所のそと」にいることになる。

私の助教としての最初の仕事（正確には三月末だったので着任前だったのだが）は、北白川分館の歴史研究室から、新設の本館・現代中国研究センターへの図書の引越し作業だった。本館四階一番奥の「現代中国情報資料集積基地」には、人文研所蔵図書のうち近代中国関連の新聞・公報と新編地方志を中心とした図書が配架されている。その管理が私の仕事のひとつだったわけだが、その作業の中でわかつたいくつかのことについて、この場を借りて書き残しておきたい。

○『アース・チャイナ・ヘラルド』

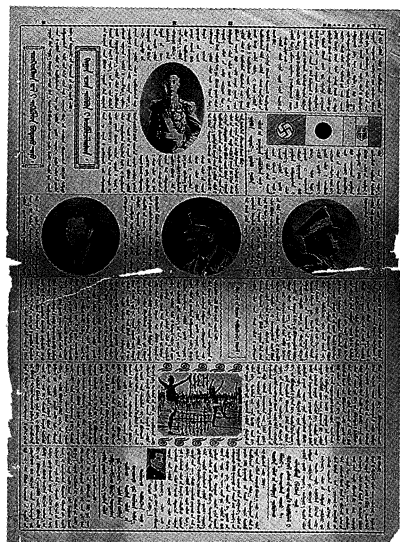
正式な紙名は *The North-China Herald and*

Supreme Court & Consular Gazette（以下NCH）。

一八五〇年から一九四一年まで上海で刊行されていた、近代中国を代表する英字週刊紙である。マイクロフィルム状態で所蔵している機関は多いが、人文研にはこのNCHの原本が比較的まとまった形（vol. 146-172, 174, 186-205, 210-216; 1923-1929, 1930, 1933-1937, 1939-1940）で所蔵されていた。ただ当初は図書館に登録されておらず、京都帝国大学の受領印と『京帝大法』[D33N]という請求番号が貼られているだけだった。不思議に思って図書掛の担当の方に問い合わせたところ、時期は不明ながら過去に法学部から移管されたものとわかった。そこで目録を作成して図書に登録してもらい、さらに後から購入したマイクロフィルムで欠落部分を補って、ほぼ一揃いのNCHが現代中国研究センターで利用可能となった。なお、現在も法学部図書室には同じ受領印のNCHが三日分だけ所蔵されている。何らかの理由で移管の際に残置されたものと思われる。

○『奉天蒙文報』・『青旗』

『奉天蒙文報』(*Mülden-ü mongyol sedkil*) は奉天省の奉天（現遼寧省瀋陽）で一九一八年から一九二〇年まで発行されていたモンゴル語週刊新聞。『青旗』(*Köke tury*) は満洲国の首都だった当時の吉林省の新



『青旗』第1号, 1941年1月6日

京（現長春）で一九四一年から一九四五年まで発行されていたやはりモンゴル語の週刊新聞である。前者は第五〇二八号（一九一八年九月七日）一九一九年二月十五日、後者は創刊号から第四一〇号（一九四一年一月六日）二月二七日）が人文研に所蔵されている。これらも図書館に登録されておらず、中国語新聞と一緒に新館の書庫一階に配架されていた。「中西印刷（株）寄贈 1983.3.28」と書かれた紙箱に納められていたため、中西印刷さんに問い合わせてみたのだが経緯は不明のことだった。

これらはいずれも大阪大学外国学図書館の石濱文庫

などにしか所蔵が確認できない貴重な史料なのだが、図書館に登録されておらず、また人文研内部にモンゴル近代史を専門とする研究者が少なかったこともあったか、今まで存在自体が一般に知られていなかった。保存状態も必ずしも良好とはいえなかったもので、既に現代中国研究センターの予算で全頁を画像データ化してある。将来的にはインターネット上で公開ができればと考えている。

なお、歴史研究室から現代中国研究センターに移動させた資料には、以上の他にも図書館に登録されていない新聞・雑誌のマイクロフィルムや影印本が大量に含まれていた。そこで、石川禎浩先生が助手時代に作成した「京都大学人文科学研究所中国新聞総目録」を元に改めて目録を作成し、現代中国研究センターHP (<http://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp/~rcmc/index.htm>) 上で公開した。これを見て史料閲覧の申し込みをしてくる方も時折いるため、多少の意味のある作業ではあったようだ。

この文章の校正が、私の人文研助教としての最後の仕事（正確には四月以降なので離任後になるのだが）になる予定である。史料に始まり史料に終わる、実に恵まれた時間だったと思う。この間に人文研に何ほどの貢献ができていたことを切に願う。

朝鮮民族運動史研究と野球

小野 容 照

ここ最近、従来の専門である朝鮮民族運動史研究と並行して、朝鮮における野球の歴史について研究している。朝鮮の野球について研究しようと思ったのは、野球史にせよ民族運動史にせよ、日本語と韓国語ではどちらも朝鮮民族の「運動史」研究であるというくだらない理由もないわけではないが、私の韓国留学時代の経験が大きい。

「運動」という言葉は、英語にするとスポーツとムーブメントに区別されてしまうが、日本語と韓国語では、どちらの意味でも使うことのできる漢字語である。韓国語にはこうした漢字語が相当多く、しかも、その大半が日本語のそれと同じだから、各漢字に該当するハングルさえ覚えてしまえば、自動的に語彙も増えていくことになる。各種の野球用語も同様で、例えば「防御率」であれば、「防」、「御」、「率」に該当するハングルさえ覚えていれば、すぐに韓国語に訳することができる。

このように、日本語と韓国語の漢字語が共通しているという韓国語学習者にとって何とも有難い状況になっている背景には、西洋から流入した概念を漢字に翻訳した近代日本の文化的影響力や植民地支配といった歴史的要因がある。野球用語も、かつて正岡子規がシヨートストップを「短遮」と直訳し、それを中馬庚が「遊撃手」と改めたような日本人による野球用語の漢字化の結果が、朝鮮に流入したのである。

私がこのことを強く意識したのは、韓国に留学していた二〇〇六年のことであった。この年三月、メジャーリーグベースボール機構が主催する野球の国際大会、ワールド・ベースボール・クラシックが初めて開かれ、韓国代表は一次ラウンドと二次ラウンドを全勝するなど世界にその強さを見せつけたのであった。その間、韓国では野球が話題を独占し、大学の中央図書館にも巨大モニターが設置され、韓国選手がストライクを投じるだけで拍手が沸き起こるという盛り上がりようであった。

そして、おそらくこの活躍を背景としてのことだと思われるが、大会の翌月から、日本で翻訳された野球用語で埋め尽くされている韓国野球用語を独自のものとする動きが始まった。もともと、全ての野球用語を韓国式に改めるのは不可能なので、英語の語源と意味

が異なる野球用語が見直された。例えば、「死球（デッドボール）」は正岡子規の時代から使われていた用語だが、その語源である Hit by pitch に意味を近づけ「몸에 맞는 공（体にくっかった球）」、「防御率（Earned Run Average）」は「平均自責点」に、といった具合である。とくに「防御率」は野球以外でも使われることのあった用語で、ある学会で講演者が「○」が起こる確率は宣銅烈の防御率より低い（宣銅烈の全盛期の防御率は韓国プロ野球で一九九三年に記録した〇・七八、簡単に言えば二試合に一度しか失点しない）」と言っているのを聴いたことがある。

このように広く定着していた「防御率」も、近年では「平均自責点」と呼称するのが定着しつつある。あくまでも野球界の話ではあるが、大げさに言えば、日本と朝鮮の近代化過程の結果として共通の漢字語を使っていた時代が、今（一部ではあるが）終わろうとしている。そして、こうした時代の転換点に韓国で立ち会ったことが、現在私が朝鮮野球史を研究している主な理由となっている。

以上のような事情により朝鮮野球史について調べている。その第一弾、朝鮮でベースボールが明治の時代に中馬庚が訳出した「野球」と呼称されていく経緯については拙稿「朝鮮における野球の受容」『韓流・日

流』（勉誠出版、二〇一四年）に譲るとして、最近感じているのは、ムーブメントの方の運動史も重要だということである。

記録上、朝鮮人として最初に野球をプレイしたのは独立運動家の徐載弼（六番センター）であり、著名な知識人の尹致昊も度々野球の試合を観戦しに行っていたことが日記に書いてある。また、民族意識の涵養を目的として朝鮮人が野球の試合を行っていた側面もあった。

したがって、朝鮮野球史研究は、スポーツとムーブメント両方の意味を持った紛れもない朝鮮民族「運動史」研究だと言えそうである。今後は、独立運動史を研究していた人間が何故急に野球史？と聞かれたら、もう少し自信を持って、「朝鮮民族運動史が専門ですから」と答えよう。

恋と戦争の外交術

——オペレッタと第一次世界大戦——

小 川 佐和子

子供の頃、将来の夢の一つはオペレッタ歌手になることだった。正確にはオペラ歌手かオペレッタ歌手か

(悲劇のヒロインか、コケティッシュな喜劇女優か)どちらを選ぶか真剣に悩んでいたものだ。ワグネルもヨハン・シュトラウスも歌いこなすルネ・コロのような両刀使いはいるが、歌姫ではそうはいない。結局、小学四年生の秋に決意したのは、アデーレ(オペレッタの金字塔『こうもり』の女中役)の道だった。それからというもの、アデーレやペピ(『ウィーン気質』、チボレッタ(『ヴェネツィアの一夜』)、シルヴァ(『チャールダッシュの女王』)、マリッツァ(『マリッツァ伯爵夫人』)等々、ありとあらゆるオペレッタ・ヒロインの人生を夢見て、甲府盆地の片田舎で青春を送っていた。祖父が与えてくれたオペレッタのスコアや鮫島有美子がハンナを演じた二期会の日本語対訳を隅から隅まで暗記し、意味も分からずウィーン方言の語感

を覚え、レーザーディスクが擦り切れるまで何度も見ては、愛宕山(甲府市)の中腹にある女の園へと通う道すがら「男はお馬鹿な騎兵さん、女はかくも不実な生き物」などと口ずさんでいた。オペレッタの聖地ウィーンに憧れ、世の男女は歌で愛の告白をするものだと半ば真剣に信じていたが、東京へ出てきてから、どうやらそうではないらしい殺伐とした浮き世に幻滅したのだった。「夢」と「現実」の対決、それはオペレッタの理解を深める一助になった。

オペレッタは必ずしも「夢」ばかりを謳い上げてはいない。むしろ「浮き世」の悲哀を裏に刻み込むことで、淡い夢に過ぎない舞台をいつそう引き立てる。とかくオペレッタは現実逃避の軽佻浮薄なお芝居と思われがちだが、夢と現実の対立と融合が軸となっているように私には見える。砂糖菓子のように甘いロマンスの世界へ単に観客を陶醉させるのではない。ときに何かゴツゴツとした過酷な現実をお菓子箱の底に潜めている。しかしその現実を決して露には出てこない。あくまでウィットとコケットリーのヴェールをかぶって表象される。浮世離れた甘美な夢に覆われた見たくもない現実、わけても最も醜悪な「現実」こそ、他でもない「戦争」であった。

オペレッタとは、一見ただのおちゃらけた大衆演劇

に見えるものの、実は辛辣に世界の様相を描きだす秀逸な戯画なのである。『こうもり』（一八七四年）において、主人公のアイゼンシュタイン（鉄）がプロイセン、その妻ロザリンデ（薔薇）がオーストリア、ハンガリー、退屈しているオルロフスキー侯が帝政ロシアのそれぞれメタファーであることはよく知られている通りだが、ここでは一例として『メリー・ウイドウ（陽気な未亡人）』を見てみよう。無邪気に『メリー・ウイドウ』が好きだと口に出すと、非難の嵐を浴びてしまうことにしばしば憤るが、こちらもきわめて戯画的に第一次世界大戦直前のヨーロッパ世界の構図を嘲弄している。

フランツ・レハールの代表作『メリー・ウイドウ』（一九〇五年）はいたって単純なストーリーだ。現代風に簡単に記述しよう。舞台は架空のポンテヴェドロ国。肉食系田舎娘のハンナは、三流外交官ダニロ・ダニロヴィッチ伯爵と付き合っていたが、ダニロがあまりに不甲斐ないので、腹いせに年老いた富豪と結婚する。傷心のダニロは故郷を去り、パリ勤務へ。失恋の痛手と仕事の憂さを晴らすべく、ダニロは毎晩キャバレー「マキシム」で女遊びに耽る。それでも根は誠実で、ハンナを一筋に想い続ける。一方、一週間で夫を亡くしたハンナは莫大な遺産を相続。すぐに彼女はダ

ニロを追いかけてパリへ行くが、相変わらず野暮で女心が分からない元カレを間拔けな兵隊と罵る。けれど、甘いワルツの雰囲気、酔い、四分の三拍子の中で二人はモラルも四分の三なくす。ダニロの巧みな足さばきと低音の美声にとろけて、ハンナは残りの四分の一の貞節も失いそうになるが、陥落まであと一歩というところで邪魔が入る。ポンテヴェドロ国としては、ハンナがどこぞのバリ野郎と再婚して遺産が国外に流出しては国家の一大事、何とか意地を張り合うダニロとハンナを結婚させようと目論む。結婚を切り札に、二人は恋の外交戦術を繰り広げ、とうとうダニロが愛の告白をして二人はめでたく契りを結ぶ。

「焦らし焦らし」↓「すったもんだ」↓「めでたしめでたし」、というこのお決まりの筋書きは、お色気ロマンチック・コメディの原型となり、エルンスト・ルビッチやフランク・キャブラのハリウッド映画、ミュージカル、そして宝塚へと系譜をたどっていくことだろう。そして何よりも、観客の身体感覚を疼かせるウインナ・ワルツの旋律とリズム感が、ヨハン・シュトラウス時代のオペレッタとは異なるレハールの最大の特長である。

架空の国ポンテヴェドロとは、当時躍進していたモンテネグロを揶揄しており、登場人物のダニロ、ツェ

ータ、ニエグシユといずれもモンテネグロの歴史に関わりの深い名前である。ヨーロッパの中心であるパリの都会性と辺境の東欧の愛国心という対比もオペレッタでは頻繁に描かれる（ウィーンとハンガリーの対比もしかり）。そのあたりも議論を深めると興味深く、現実主義者ヴァランシエンヌと感傷家カミーユの関係や、狂言回しニエグシユの愛国者キャラクターについても語り尽くしたいところだが、ここでは「二国同盟」という観点から少しだけ見てみたい。

『メリー・ウイドウ』は、当時のヨーロッパにおける二国同盟と三国同盟を下地に、男女の二国同盟（＝結婚）と三国同盟（＝浮気）を描いている。第一幕で述べるダニロの恋愛の信条は「すべからく恋すべし。婚姻は稀に。しかし断じて結婚はするなかれ」。つまり外交官としての信条は、諸外国と親交を深めるのは良いが、同盟などは結ぶものではない、ということだ。第三幕で、はつきりとダニロは歌う。「外交官として申し上げれば、二国同盟は永遠のものであるべきだ。だが、ふと気を抜いたときに、すぐに三国同盟へと変わる人が多い。ヨーロッパの均衡もどこか二国が同盟すれば、すぐに崩れてしまう。その理由は明白。ご婦人方とはかく自由開放政策がお好きだ。いずれにしても不誠実な国にはご用心あれ」。結婚すれば男も女

も浮気はつきもの、やすやすと同盟を結ぶのは馬鹿らしい。三国同盟や露仏同盟など、ヨーロッパ列強が同盟合戦に奔走する大戦直前の世界に対して、ダニロはさらっと皮肉を言う。作品全体としてはモンテネグロを集中攻撃しているような印象を与えるが、さらに一皮むけばヨーロッパ世界そのものをアイロニカルに暴き出すのである。

だが、そんなダニロが選んだ結末はハンナとの「結婚」であった。それは新たに結ばれた同盟ではなく、一度破綻した二国の和解である。ハンナのダニロに対する宣戦布告で開戦した男と女の戦いは（第二幕《間抜けな兵隊の歌》、ハンナが読み上げる亡き夫の遺言をダニロが受諾したことで（＝戦争終結宣言の受諾）、遺産相続という賠償問題も解消されて幕を閉じる。今やダニロは真の愛の告白が可能となった（第三幕《唇は語らずとも》。また、二人の和解は、ポンテヴェエド口国家の経済的安泰を保証するものとなる。現実にはあり得ない純愛と平和のハッピーエンド。二人の愛は世界を救う、今で言うセカイ系的解決とも言えるかもしれない。だが、それも第一次世界大戦勃発前の儚い夢に過ぎなかった。

果たして純愛は破滅の予兆なのだろうか。『メリー・ウイドウ』から二〇年後、『ロシアの皇太子』（一

九二七年）、『微笑みの国』（一九二九年）とレハール
のオペレッタは悲劇化していく。「悲劇のオペレッタ」
とは形容矛盾であるが、つまりはオペレッタの崩壊な
のである。「現実」という下層のテクスト群が「夢」
を描いた上層のテクストそのものを乗っ取ってしまう
転換の現象であり、それはすぐさまオペレッタ自身の
死でもある。作品内の悲劇のエンディング、引いては
オペレッタそのものの終焉。これほどに悲しい「夢」
のほつれを聴くのは堪えがたい。「夢」から覚めてい
くのを自覚し、悲しみを微笑みの下に隠すスー・チヨ
ンのアリア《君こそ我が心の全て》は、リーザへの愛
を歌っただけでなく、『微笑みの国』にシンボライズ
されるオペレッタの世界が自滅していく様相を予感し
た悲痛の叫びのようにも聴こえる。

お菓子箱の底に押込められていた「現実Ⅱ戦争」は、
第二次世界大戦というさらなる強烈な現実として膨れ
上がり、砂糖菓子をつばみじんにし、菓子箱もろとも
壊してしまった。それは作曲家レハール自身のナチ
スとのかかわりも個人的な背景として根深いだろう
（レハールのオペレッタがお気に入りだったヒトラー
は彼と親交を深めつつも、夫人がユダヤ人である弱み
を握っていた。それゆえ、レハールは生涯に渡り「ナ
チスの協力者」というレッテルを余儀なくされた）。

一九三四年の同じく悲劇のオペレッタ『ジュディッ
タ』を最後に、ナチスの庇護を受けたレハールは、そ
の後一切筆を取ることはなかった。かつて熱烈に愛し
合ったジュディッタと偶然に再会したオクターヴィオ
は、もう一度やり直そうとすがりつく彼女を振り払い、
切々とこう歌う。「僕が愛した彼女は幻覚だったのか。
甘い愛の歌はもう色褪せてしまった。僕の恋はおとぎ
話だったんだ！」。——これは『ジュディッタ』の、
そして「オペレッタ」そのものの幕切れのセリフであ
る。

書いたもの一覧 二〇一三年四月〜二〇一四年三月 (氏名五十音順 ●は単行本)

浅原達郎

保訓「仮中」故事試解

日古 二二号 四月

中くらい(八一人)

日古 二二号 四月

金藤(八一人)

日古 二二号 一月

石井美保

Playing with perspectives: spirit possession, mimesis, and permeability in the *bwita* ritual in South India. *Journal of the Royal Anthropological Institute* 19(4) 十一月

神霊が媒介する未来へ―南インドにおける開発、リスク、プータ祭祀

社会人類学年報 三九巻 十二月

呪物の幻惑と眩惑 田中雅一編「越境するモノ(フェティシズム研究2)」

京都大学学術出版会 三月

パッションの共同体へ―南インドにおける神霊憑依、開発、身体

コンタクトゾーン六号 三月

石川 禎浩

中共二大与中共党史研究史 中共一大会址纪念馆編「中国共產党創建史研究文集(二〇〇二―二〇一二年)」

上海人民出版社 四月

書評 阿南友亮「中国革命と軍隊」

中国研究月報 七八三号 五月

小説《劉志丹》事件的歴史背景 『日本当代中国研究 二〇一二』 人間文化研究機構当代中国地区研究 十一月

李大釗―中国マルクス主義の父 趙景達等編『講座 東アジアの知識人』第三巻 有志舎 十二月

近代東アジアにおける「奴隸」概念 弘末雅士編「越境者の世界史―奴隸・移住者・混血者」 春風社 十二月

蘇聯《国外》雑誌刊登的毛沢東略伝 中共党史研究 一二期 十二月

伊藤 順二

油槽船チフリスと出会う 所報人文 五月

イスタンブールの英軍墓地 図書新聞 二月一五日

稲葉 穰

Sedentary Rulers on the Move: The Travels of the Early Ghaznavid Sultans. D. Durand-Guédy (ed.), *Turko-Mongol Rulers, Cities and City Life*. E.J. Brill. 一〇月

前近代のカーブル―東部アフガニスタンにおける大都市の変遷― 東方学報京都 第八八冊 一二月

8―10世紀ヒンドウークシュ山脈の南北 西南アジア研究 七九号 一二月

稲本 泰生

事典項目執筆 閻魔ほか 中国文化史大事典

大修館書店 四月

浄土信仰史上の當麻曼荼羅 學術シンポジウム「綴織當麻曼

荼羅」要旨集

奈良国立博物館 四月

日本(古代)七(二〇一二年の歴史学界・回顧と展望)

史学雑誌 第一二二編 第五号 五月

ロータール・レダローゼ「岡山―仏が説法した山―」へのコ

メント 田中淡・高井たかね編『伝統中国の庭園と生活空

間―国際シンポジウム報告書』

京都大学人文科学研究所 六月

「玩物喪志」雑感 人文 六〇

都大学人文科学研究所 六月

歴史ミュージアム「刺繍釈迦如来説法図」週刊『新発見！

日本の歴史一〇 飛鳥時代二 飛鳥・藤原京の理想と現

実』朝日新聞出版 九月

「国宝 鑑真和上展」追想記 唐招提寺編『風月同天―国宝

鑑真和上展 十年間の記録』受容に関する覚書 十一月

隋唐期東アジアの「優填王像」 東方学報 八八冊 十二月

やまとみち 一三三三号 二月

鑑真和上の「遺産」―唐招提寺の宝物と仏像

やまとみち 一三三三号 二月

井波 陵 一

●翻訳『新訳紅楼夢』第一冊

岩波書店 九月

●翻訳『新訳紅楼夢』第二冊

岩波書店 十月

新訳紅楼夢 複雑な人間関係鮮やかに

産経新聞(夕刊) 十一月二十一日

●翻訳『新訳紅楼夢』第三冊

岩波書店 十一月

●翻訳『新訳紅楼夢』第四冊

岩波書店 十二月

●翻訳『新訳紅楼夢』第五冊

岩波書店 一月

●翻訳『新訳紅楼夢』第六冊

岩波書店 二月

●翻訳『新訳紅楼夢』第七冊

岩波書店 三月

岩井 茂樹

税・役からみた中国の国家と社会 岡本隆司編『中国経済

紙』名古屋大学出版会 十一月

釐金 岡本隆司編『中国経済紙』

名古屋大学出版会 十一月

岩城 卓二

●本興寺文書二卷(共編)

清文堂出版 四月

武士と武家地の行方―城下町の一九世紀 高木博志編『近代

日本の歴史都市』思文閣出版 八月

●西宮神社御社用日記第二卷(共編)

清文堂出版 十月

ウィッテルン・クリスティアン

Towards an Architecture for Active Reading, in: *Scholar-*
ly and Research Communication. 四月

A first look at Kanripo, a distributed repository for pre-

modern Chinese texts, in: *PNC 2013 Annual Conference and Joint Meetings*.

十二月

Conventions for a repository of premodern Chinese texts
東洋学へのコンピュータ利用 第二五回研究セミナー

三月

王 寺 賢 太

Multitude/Solitude—マキアヴェッリをめぐるネグリ、ポー

コック、アルチュセール 現代思想 第四一卷九号 七月

●債務共和国の終焉—私たちはいつから奴隷になったのか（市田良彦・小泉義之・長原豊との共著）

河出書房新社 九月

一般意志の彼方へ—「諸意志の協調」とデイドロ晩年の政治的思考
思想 一〇七六号 十二月

鼎談 今、デイドロを読むために（逸見龍生、田口卓臣とともに）
思想 一〇七六号 十二月

翻訳 フィリップ・ソレルス「幸福なデイドロ」（田口卓臣との共訳）
思想 一〇七六号 十二月

翻訳・解題 ドニ・デイドロ「ある哲学者の書類入れからこぼれた政治的断章」
思想 一〇七六号 十二月

翻訳・解題 ジョルジュ・ベンレカッサ「明証性」の変貌—デイドロと〈政治的なもの〉の限界—
思想 一〇七六号 十二月

解題 ジャンルイジ・ゴッジ「雄弁家としての歴史家—『両インド史』冒頭のイメージから」（森元庸介訳）

思想 一〇七六号 十二月
首相の言動、広い視野で見きわめよ

毎日新聞 二月一日朝刊
インタビュ—資本と国家を超えて 『柄谷行人インタビュ—ズ1977-2001』所収

講談社 二月
翻訳・解題 ブリュノ・ベルナルデイ「ジャン・ドブリとルソー」ブリュノ・ベルナルデイ『ルソーの政治哲学』所収

勁草書房 二月
都知事選「宇都宮氏次点」の意味は

毎日新聞 三月一日朝刊
ロシア十月革命がもたらした衝撃

図書新聞 三月九日号
被災者の憤りを政治の舞台に 毎日新聞 三月二九日朝刊

大 浦 康 介

『わが秘密の生涯』(My Secret Life)を読む
日本ヴィクトリア朝文化研究学会ニューズレター二二号 五月

憤慨せよ！
京都新聞（夕刊） 五月一四日
「遠くを見よ」は正しいか 日本文藝家協会（林真理子ほか）

編『ベスト・エッセイ二〇一三』 光村図書出版 六月
精霊と師匠

もの食う人々
京都新聞（夕刊） 七月一七日
ガンつける

新潮 二〇一三年一月号 十月
文学と遊民
京都新聞（夕刊） 十一月三日

情報という魔物
京都新聞（夕刊） 一月一四日
ほとんどに
京都新聞（夕刊） 三月一七日

岡田 曉生

●オペラの終焉…リヒャルト・シュトラウスと《バラの騎士》の夢
ちくま学芸文庫 一月

Imaginary Song of the West: Ryuichi Sakamoto, Masahiro Miwa and the Music of Postmodern Japan. Hee Sook Oh (ed.) *Contemporary music in East Asia*, Seoul National University Press 三月

岡村 秀典

山中の仏教寺院—西インドの石窟寺院を中心として

聖なる巖—窟の建築化をめぐる比較研究 三月
三至六世紀東西文化交流的見証…南朝銅器的科技考古研究 (共著) 南方文物 一期 三月

「商代甲骨卜辞中の建築名称と建築礼制」へのコメント 伝

統中国の庭園と生活空間 京都大学人文科学研究所 六月

序 雲岡石窟 一卷 科学出版社東京 十二月

漢三国西晋時代の紀年鏡—作鏡者からみた神獸鏡の系譜

後漢鏡淮派の先駆者たち—三鳥・銅槃伝 東方学報 京都八八冊 十二月

名工孟氏伝—後漢鏡の転換期に生きる 東アジア古文化論攷 三月

序 雲岡石窟 (中国社会科学研究所編訳) 中華文明の考古学 同成社 三月

序 雲岡石窟 (中国社会科学研究所編訳) 科学出版社 三月

小川 佐和子

Asta Nielsen and Shimpia Films in Japan. Martin Lot-
PERDINGER and Uni JUNG (eds.) *Importing Asta
Nielsen: The International Film Star in the Making
1910-1914*. John Libbey Publishing. 六月

解説 シネマの冒険 闇と音楽二〇一三 ロイス・ウェバー
監督選集 ロイス・ウェバー、初期ハリウッドにおける女
性監督 NFCニューズレター 第一一一号 一〇月

岩波書店辞典編集部『世界人名大事典』 一二月

リレーエッセイ 第一次世界大戦を考える (二) 図書新聞 三一四一号 一月

小野 容照

成楽馨—朝鮮の命運を世界戦争に託した独立運動家

図書新聞 三月二九日

小野寺 史郎

書評 段瑞聰『蒋介石と新生活運動』(王蘭訳)

王清穆『農隱廬日記』に見る民国前期の江南士紳 一輯 九月

『長江流域社会の歴史景観』 森時彦編

京都大学人文科学研究所附属現代中国研究センター 十月

翻訳 桑兵「南潯・湖社・国民党」 森時彦編『長江流域社

会の歴史景観』

京都大学人文科学研究所附属現代中国研究センター 十月

図書新聞 三月二九日

— 49 —

国慶与国恥—近代中国紀念儀式的表象戰略

동아시아문화연구(東アジア文化研究) 五五輯 十一月

●国旗、国歌、国慶—近代中国的国族主義与国家象徵(周俊宇 訳) 社会科学文献出版社 三月

菊地 暁

ポルトレの人 桑原武夫—その人物描写をかんがえる—

慶応義塾大学出版会H P 四月

要旨 主な登場人物2—京大文化史学派における「先祖の話」受容— 日本民俗学 二七四 五月

書評 宗教社会学の会編『聖地再訪 生駒の神々』

宗教研究 三七六 六月

「分館」雑感

慶応義塾大学出版会H P 七月

新京都学派Ⅱ京大人文研のユニークさを「新書」から読み解く Kobaba 一三 九月

書評 瀝青会著『今和次郎「日本の民家」再訪』

生活学論叢 二二三 九月

転々録顛末—民研本調査余話—

国際常民文化研究機構年報 四 九月

東方部の「折口フアン」たち—あるいは、「新しい歴史学」としての考古学とミンゾク学—

慶応義塾大学出版会H P 一〇月

主な登場人物2—京大文化史学派における「先祖の話」受容—

日本民俗学 二七六 十一月

●二〇一三年十月十六日未明土石流災害に伴う伊豆大島元町地

区緊急調査報告書(共著)

《千年村》運動体 一二月

『世界文化』と人文研—あるいは、治安維持法の悲喜劇—

慶応義塾大学出版会H P 一月

多賀城鹿踊「被災」始末—多賀城市八幡地区の来歴を踏まえて—

高倉浩樹・滝澤克彦編『無形民俗文化財が被災するということ』

東日本大震災と宮城県沿岸部地域社会の民俗誌 新泉社 一月

誌

●ライフヒストリーレポート選二〇一二(編著)

京民研 二月

金 文 京

東アジアの西廂記 図書

岩波書店 四月

三国志外 東亜細亜の 国際関係 権仁翰編『三国志』 東夷

伝の 世界 成均館大学出版部 四月

韓国における漢字・漢文教育の現状中国—社会と文化 二八

号 七月

Towards Comparative Research on "Written Prayers"

(Yuanwen/Gannon) in China and Japan. ACTA ASI-

ATICA, BULLETIN OF THE INSTITUTE OF

EASTERN CULTURE, 105, THE TOHO GAKKAI

吉川英治『三国志』(一)解説 星海社 八月

●18세기 일본지식인 조선을 엿보다 (共著) 八月

成均館大学出版部 八月

書評 福田安典著『平賀源内の研究—大坂篇 源内と上方学

界」

日本文学 六二号 一〇月

書評 三山陵編著「フルカラーで楽しむ中国年画の小宇宙」

庶民の伝統芸術」 東方 三九四号 一二月

福澤諭吉の漢詩18 明治十二年、義塾日々の風景

福澤手帳 一五九号 一二月

高麗時代漢語教科書『朴通事』の成立年代について 藝文

一〇五号 慶大文学部 一二月

●三国志の世界

山人としての杜甫 中国文学報 八三号 京大中文 二月

朝鮮燕行使が見た清朝の演劇—東アジアの視点から 磯部彰

編「清朝宮廷演劇文化の研究」 勉誠出版 二月

弘治本『西廂記』の挿絵について 瀧本弘之・大塚秀高編

「中国古典文学と挿画」 勉誠出版 二月

小池 郁子

アフリカ系アメリカ人の地域社会と家族—宗教的家組織の形

成からみるオリシヤ崇拜運動 椎野若菜編「シンゲルがっ

なく縁…シンゲルの人類学第二巻」 人文書院 三月

社会運動と軍事的性格 田中雅一・上杉妙子編「軍隊がつく

る社会／社会がつくる軍隊(1)」 平成二〇—二三年度科

学研究費補助金(基盤研究B) アジアの軍隊にみるトラン

スナシヨナルな性格に関する歴史・人類学的研究報告書

三月

オリシヤ崇拜と「奴隷」—アメリカ黒人の社会運動をめぐっ

て「宗教研究」 三五四巻

三月

古 勝 隆 一

書評 高橋均「論語義疏の研究」 東方 三八九号 七月

●翻訳 余嘉錫「目錄学發微」(共訳) 平凡社 七月

解説 余嘉錫「目錄学發微」 平凡社 七月

項目執筆 彭元瑞・吳騫・陳鱣・錢泰吉・章鈺・傅增湘・余

嘉錫・陳乃乾・王重民・趙万里・張秀民・劭懿辰・張湛・

樊遜・費昶・魯勝・杜佑・楊士勛・陸德明・劉炫・賈公

彦・孔穎達・啖助・趙匡・陸淳 岩波書店辞典編集部編

『岩波世界人名大辞典』 十二月

小 関 隆

書評 津田博司「戦争の記憶とイギリス帝国」

歴史学研究 九一〇号 十月

コラム リレーエッセイ 第一次世界大戦を考える(5) オ

ペラ「銀の杯」の鮮烈な幕切れに漂う、戦争記念公園のそ

れと似た寒々しさ 図書新聞 二月一日

瀬戸口 明 久

書評 団地の思想 婦人之友 一〇七巻六号 六月

書評 若生謙二著「動物園革命」 ヒトと動物の関係学会誌 三五号 七月

書評 科学者の伝記を読む 婦人之友 一〇七巻九号 九月

境界と監視のテクノロジー—自然と人工のあいだ

情況 四期二巻六号 十一月

書評 故郷から遠く離れて

婦人之友 一〇七卷十二号 十二月

第一次世界大戦と科学

図書新聞 三一四八号 三月

書評 海を越える人びと

婦人之友 一〇八卷三号 三月

高井 たかね

●伝統中国の庭園と生活空間—国際シンポジウム報告書(共編)

編

京都大学人文科学研究所 六月

明清居住空間考—八仙卓と庁堂を中心に 武田時昌編『術数学の射程—東アジア世界の「知」の伝統—』

京都大学人文科学研究所 三月

項目執筆 慧達・袁広漢・王爾・王璧文・蒯祥・闕鐸・孔彦舟・高隆之・朱啓鈴・朱勳・蔣少游・茹皓・薛懷義・单士元・張南垣・福登・楊務廉・雷発達・李懷義・李冲・梁九・梁師成・林有麟 岩波書店辞典編集部編『岩波世界人名大辞典』

岩波書店 十二月

高木 博志

●人文学報(特集・近代都市の諸相) 一〇四号(編集)

京都大学人文科学研究所 三月

The Buddhist Faith of the Japanese Imperial Family after the Meiji Restoration. Japan Review 25

二〇一三年に文化財として陵墓を考える(特集 天皇家古墳のいま) 季刊 考古学 一二四

八月

●近代日本の歴史都市—古都と城下町(編著)

思文閣出版 八月

カルチャーインサイド…近代化へ「作られた」古都

毎日新聞 十一月八日

原爆と馬町空襲の経験

京都新聞 二月二十一日

近代天皇制の「秘匿性」と御物

田中雅一編『フェティシズム研究』二

京都大学学術出版会 二月

●週刊 日本の歴史 三九号 「国民」を生んだ帝国の文化(共編)

朝日新聞出版 三月

明治・大正期の長岡天満宮の整備

『長岡天満宮資料調査報告書 古文書編』

長岡京市教育委員会 三月

高 階 絵里加

幸野樗嶺《秋日田家図》について—歴史画としての風景—

高木博志編『近代日本の歴史都市—古都と城下町—』

思文閣出版 七月

「明治洋画界と岡倉」『岡倉天心 近代美術の師』

平凡社 七月

美術逍遙 日本経済新聞(夕刊)

四月八日、四月一五日、五月二七日、六月三日、七月一日、七月八日、八月一二日、八月一九日、九月三〇日

展覧会 日本経済新聞(夕刊)

十月十五日、十一月六日、十一月二六日、十二月一七日、一月二一日、二月二八日、三月一一日

高 田 時 雄

日本學者品評伯希和對漢學的貢獻 敦煌學輯刊 二〇一二年

第四期(總第七十八期)

十二月

Qianlong Emperor's Copperplate Engravings of the "Conquest of Western Regions". *Memoirs of the Research Department of The Toyo Bunko*, 70 一月

古代西北方言的下位變體 敦煌研究 二〇一三年第二期(總

第一三八期)

四月

俄羅斯《黑皮叢書》簡介 國際漢學研究通訊 第七期 六月

On the Emendation of the *Datang Xiyu* during Gaozong's Reign: An Examination Based on Ancient Japanese Manuscripts. Imre Galambos (ed.) *Studies in Chinese Manuscripts: From the Warring States Period to the 20th Century*. 十月

La contribution de Paul Pelliot à la sinologie dans la perspective des savants japonais. J.-P. Drège et M. ZINK (éds.) *Paul Pelliot: de l'histoire à la légende*, Académie des inscriptions et belles-lettres. 十月

竹 沢 泰 子

●中等教育でまなぶ「人種」「民族」とヒトの多様性 公開シンポジウム報告書 京都大学人文科学研究所 十月

●アジアとアメリカの帝国を越えて 国際シンポジウム報告書 京都大学人文科学研究所 三月

●人種表象の日本型グローバル研究 平成25年度研究成果報告書 京都大学人文科学研究所 三月

近代日本における移民と人種主義 吉原和男、吉原直樹、蘭

信三、伊豫谷登士翁、塩原良和、関根政美、山下晋司編
『人の移動事典—日本からアジアへ・アジアから日本へ』 丸善出版 十一月

武 田 時 昌

天の時、地の利を推す兵法—兵陰陽の占術理論

中国思想史研究 三四号 三月

お雇い外国人の温泉研究とその周辺—東と西の温泉医学 (一) 医道の日本 八三五号 四月

近世日本の上方温泉論争—東と西の温泉医学 (三)

医道の日本 八三六号 五月

茶の功徳と養生—万能薬の文化史 (一)

医道の日本 八三七号 六月

ケシ坊主の甘い誘惑—万能薬の文化史 (二)

医道の日本 八三八号 七月

東洋のテリアカを捜せ—万能薬の文化史 (三)

医道の日本 八三九号 八月

検校になった人々—鍼按師の原像

医道の日本 八四〇号 九月

二日灸と月見鍼

医道の日本 八四一号 十月

漢城・ソウルの良医に出会う

医道の日本 八四二号 十一月

『医心方』を伝える—医療文化史サロン展二〇一二を終えて

医道の日本 八四三号 十二月

ハレー彗星とクロポトキン—漢方復興の革命児・中山忠直伝

(一) 医道の日本 八四四号 一月

我が医学戦線異状あり—漢方復興の革命児—中山忠直伝

(二) 医道の日本 八四五号 二月

記憶と忘却をめぐる医術 医道の日本 八四六号 三月

天の時、地の利を知る科学 尾池和夫・竹本修三編『天地人三才の世界』 三月

●術数学の射程(編著) 人文科学研究所 三月

●センター研究年報二〇一三(編著) 東アジア人文情報学センター 三月

田中雅一 制度と儀礼化あるいは儀礼行動 河合香吏編『制度—人類社会の進化』 京都大学学術出版会 四月

Agency and Seduction: against a Girardian Model of Society. Kaori Kawai (ed.) *Groups: The Evolution of Human Sociality*. Kyoto University Press 四月

現代インドにおけるマイノリティへの暴力『南西アジアにおける宗教紛争と平和構築に関する比較研究』(平成22~24年度科学研究費補助金基盤研究(B)研究成果報告書 研究代表者・外川昌彦 広島大学大学院国際協力研究科) 四月

現代インドにおける女性に対する暴力—デリーにおける集団強姦事件の背景を探る

SYNODOS 五月

書評 山中弘編『宗教とツーリズム—聖なるものの変容と持続』 宗教研究 八七巻一号 六月

書評 藤本透子『よみがえる死者儀礼—現代カザフのイスラーム復興』

宗教と社会 一九号 六月

書評 新井一寛・岩谷彩子・葛西賢太編『映像にやどる宗教、宗教をうつす映像』 宗教と社会 一九号 六月

インタビュール 教員インタビュール 田中雅一 全八回(第一回 文化人類学との出会い 第二回 初めての長期フィールド調査 第三回 LSEと博士論文 第四回 セクシユアリティについて 第五回 ミクロ人類学 第六回 雑食的であることと大きな問題意識 第七回 インド研究・在日米軍基地の研究 第八回 京大の人類学と文化人類学サイコー) 京都大学大学院人間・環境学研究科文化人類学分野WEBサイト 前年四月~十月

世界インドの怪談—暴力と姦通と名誉殺人

SYNODOS 一月

フィールドとホームをつなぐ—二〇一三年度研究プロジェクト発表会に参加して 地球研ニュース 四六号 一月

●編著 フェティシズム研究2 越境するモノ 京都大学学術出版会 二月

はじめに 田中雅一編著『フェティシズム研究2 越境するモノ』 京都大学学術出版会 二月

序章 越境するモノたちを追って 田中雅一編著『フェティシズム研究2 越境するモノ』 京都大学学術出版会 二月

性を蒐集・展示する 田中雅一編著『フェティシズム研究2 越境するモノ』 京都大学学術出版会 二月

あとがき 田中雅一編著『フェティシズム研究2 越境するモノ』 京都大学学術出版会 二月

現代インドにおける女性に対する暴力 椎野若菜編『シングルの人類学1 境界を生きるシングルたち』

人文書院 三月

シングルを否定し、肯定する——日本のセックスワークにおける顧客と恋人との関係をめぐって 椎野若菜編『シングルの人類学2 シングルのつなぐ縁』

人文書院 三月

田中 祐理子

隠喩と科学の歴史—感染症と二〇世紀をめぐって

情況別冊思想理論編 三 十二月

立木 康介

座談会 無意識の生成とゆくえ(一)——「啓蒙」と「ロマン主義」の系譜をめぐって(道旗泰三氏、佐藤淳二氏と)

思想 二〇一三年四月 四月

座談会 無意識の生成とゆくえ(二)——二〇世紀の「無意識」をめぐって(多賀茂氏、塚本昌則氏、鈴木雅雄氏と)

思想 二〇一三年四月 四月

まどろみと海—エス、外の思考、《他》なる性

思想 二〇一三年四月 四月

同一化—愛と死と 精神分析的心理療法フォーラム 第一巻

七月

●露出せよ、と現代文明は言う

河出書房新社 十一月

『あまちゃん』を愛す

文藝界 二〇一四年二月号 一月

Amour en anamorphose — L'amour courtois et l'amour

lou, I. PSYCHANALYSE 29 Ères.

一月

肉のある風景—大森兄弟を深刻に読む

早稲田文学 七

二月

人間になった元天使

群像 二〇一四年四月

三月

土口 史記

名前を聞かれて百万遍

人文 六〇号 六月

中国古代文書行政制度—戦国秦漢期出土資料による近年の研究動向—

中国史学 二三巻 十月

書評 鶴間和幸著『秦帝国の形成と地域』

日本秦漢史研究 一四号 三月

富永 茂樹

メッセージ Artist-in-Residence 2011-2012: Document

京都芸術センター 四月

転位する観客—啓蒙と革命のあいだで 第八六回日本社会学会大会・抄録集

日本社会学会、十月

ニュー・ブランシュユーパリにて 京都芸術センター通信 第一六三号

京都芸術センター 十二月

読書アンケート・二〇一三 『みずび』第六三三号

みずび書房 二〇一四年一月

Kyo x Kyo Today 9... Kyo x Kyo Today, vol.4 プログラム

京都芸術センター 一月

文化芸術と地域づくり 二〇一三年度シンポジウム報告書

高野山文化圏研究会 三月

Régénérer et conserver: de l'abbé Grégoire à Jules Michelet, *Recueil des textes de la Table ronde: «La question du nationalisme en France et au Japon»*

La Fondation Maison des Sciences de l'Homme 三月

富谷 至

●「文書行政的漢帝国」

中国蘇州人民出版社 九月

庶民的識字能力與文字伝達の効用

邢義田・劉增貴編『古代庶

民社会』（中央研究院 台灣）

十二月

漢律から唐律へ——裁判規範と行為規範

『東方學報』

京都 八八 十二月

文書行政における常套句

角谷常子編

『東アジア木簡学のため

に』

汲古書院 三月

永田知之

辞典項目

皎然・莫友芝・范世・潘德輿・彭孫適・彭兆

蓀・方苞・毛先舒・姚瑩・姚燮・姚鼐・姚椿・李海觀・陸

次雲・陸嵩・李慈銘・李兆洛・劉開・劉熙載・劉大櫟・劉

体仁・廖燕・梁佩蘭・林旭・林昌彝・厲鶚・黎簡・魯一同

岩波書店辞典編集部編『岩波世界人名大辞典』 十二月

●詩僧皎然集注（共著）

汲古書院 三月

陳寅恪論及敦煌文献統計——遺墨「敦煌研究」と講義「敦煌小

説選読」

敦煌写本研究年報 八号 三月

藤井俊之

随想 寺山修司と故郷の想像力

所報人文 六〇号

六月

第一次世界大戦リレーエッセイ

常に忘却の闇に沈もうとする

第一次大戦のショック作用に与えられる言葉とは——大戦

に淵源する、「経験の事後性」

図書新聞 三三四三号 一月二五日

藤井律之

五胡十六国霸史輯佚補遺

敦煌写本研究年報 第八号

三月

藤井正人

王と酒

人文 六〇号

六月

藤原辰史

「食べもの」という幻影

世界思想 第四十号

四月

卷末論考——理想郷の現実的課題

アレクサンドル・チャヤ

ノフ『農民ユートピア国旅行記』和田春樹／和田あき子訳

平凡社 六月

分解の哲学

現代思想 第四十一卷九号

七月

十三年上半期読書アンケート

図書新聞

七月二十号

（書評）小野清美『アウトバインとナチズム』

週刊読書人 八月十六日号

文明化の曙光と黄昏をみつめて——学芸賞・受賞のことば

考える人 四十五号 八月

からっぽな手——戦後秋田の『農民詩集』から

月刊みんぱく 十二月

十三年下半年読書アンケート 図書新聞 十二月二十一日号

世界的展望なきT P P論争 図書新聞 一月一日号

第一次世界大戦の共同研究 宇山智彦編『比較研究の愉しみ』

国立大学附置研究所・センター長会議 第三部会シンポジウム報告』 北海道大学スラブ研究センター 二月

船山 徹

●仏典はどう漢訳されたのか—スートラが經典になるとき

岩波書店 十二月

梁の武帝—大乘の菩薩になりたかった皇帝

真宗文化 二二 三月

水野 直樹

A Propaganda Film Subverting Ethnic Hierarchy?: "Suicide Squad at the Watchtower" and Colonial Korea

Cross-Currents Vol. 2 No. 1 May

「京城都市構想図」に関する研究（徐東帝、宮崎涼子、川崎陽、西垣安比古と共著）

日本建築学会計画系論文集 第七八巻第六八七号 五月
名前から考える歴史と現代

であい（全国人権教育研究協議会）第六一五号 六月

一九二〇年代大阪の労働下宿—朝鮮人労働者の定着過程と関連—

チョンアム大学校在日コリアン研究所編『在日コリアン

ディアスポラの形成—移住と定住を中心に—（ソウル・ソニン）（韓国語） 六月

戦前日本在住朝鮮人を描いた美術作品

チョンアム大学校在日コリアン研究所第二回国際学術大会「在日コリアンの生活文化と変容」論文集 六月

日本の戦後体制と在日朝鮮人—参政権の「停止」と日本国憲法の制定過程をめぐって—

戦争責任研究 第八〇号、六月

「皇民化政策」の本質を考える—「皇国臣民の誓詞」をめぐって—

笹川紀勝監修『国際共同研究 韓国強制併合一〇〇年歴史と課題』明石書店（韓国語版、東北亜歴史財団）

八月

戦前京都帝国大学の朝鮮人留学生

京都大学コリア同窓会便り 第一五号 十月

尹東柱は「創氏改名」をしたのか

タシオル文学 二〇一三年冬号（韓国語） 十二月

「呂運亨」はか二三項目（および朝鮮関係項目の監修）

『岩波世界人名辞典』岩波書店 十二月

悲劇はなぜ起こったか—朝鮮北部の日本人埋葬地が語るもの—

世界 一月号 一月

朴錫胤—植民地期最高の朝鮮人エリート—

『講座 東アジアの知識人』第四巻、有志舎 三月
Stories from Beyond the Grave: Investigating Japanese

Burial Grounds in North Korea

The Asia-Pacific Journal: Japan Focus (online journal), Volume 12, Issue 9, No. 5 March

宮 紀 子

『卜筮元龜』とその周辺 汲古 六三三号 六月

現存最古級の世界地図―「混一疆理歴代国都之図」高橋典幸編『新発見! 週刊日本の歴史②鎌倉時代③対モンゴル戦争は何を変えたか』朝日出版社 十一月

地図で見る world…モンゴルの世界征服 高橋典幸編『新発見! 週刊日本の歴史②鎌倉時代③対モンゴル戦争は何を変えたか』朝日出版社 十一月

宮 宅 潔

先史時代―秦漢 岡本隆司編『中国経済史』

名大出版会 十一月
貨殖列伝と平準書と食貨志 岡本隆司編『中国経済史』

名大出版会 十一月
漢代官僚組織的最下層―「官」と「民」の間(顧其莎訳) 中国古代法律文獻研究 七輯 十二月

村 上 衛

「東アジア」を超えて―近世東アジア海域史研究と「近代」

歴史学研究 九〇六号 六月

近代中国沿海世界とイギリス―海賊、海難と密貿易 金澤周作編『海のイギリス史―闘争と共生の世界史』

昭和堂 七月

Two Bonded Labour Emigration Patterns in Mid-Nineteenth-Century Southern China: The Coolie Trade and Emigration to Southeast Asia. Gwyn Campbell and Alessandro Stanziani (eds) *Bonded Labour and Debt in the Indian Ocean World*, Pickering & Chatto. 十月
効かない証明書―19世紀末、鎮江における通過貿易問題 時彦編『長江流域社会の歴史景観』

京都大学人文科学研究所附属現代中国センター 十月
中国経済の発展と19世紀清朝のふたつの危機 秋田茂編著『アジアからみたグローバルヒストリー―「長期の18世紀」から「東アジアの経済的再興」へ』

ミネルヴァ書房 十一月

A Comparison of the End of the Canton and Nagasaki Trade Control Systems. *Itinerario*, 37(3), Cambridge University Press. 十二月

晚清時期廈門英籍華人的経済活動 謝国興編『中央研究院第四届國際漢学会議論文集: 辺区歴史与主体性形塑』

中央研究院台湾史研究所 十二月
植民地と移民ネットワークの相克―辛亥革命期、廈門における英領北ボルネオ華工募集事業を中心に

東洋史研究 七二巻四号 三月

守 岡 知 彦

コス写真研究支援ツールの可能性について

情処研報 2013-CH-99(1) 八月

A Study of Linguistic Analysis for Classical Chinese Texts. (共著) International Conference on Culture and Computing 2013. 九月

Linked Open Data for Chinese Characters. JADH 2013. 九月

古典中国語形態素コーパスの Linked Data 化の試み じん

もんこん2013 論文集 情報処理学会シンポジウムシリ

ーズ Vol.2013, No.4 十二月

比較的最近の CHISE 東洋学へのコンピュータ利用 第25 回研究セミナー 三月

矢木 毅

高麗時代の法制について―いわゆる高麗律の存否問題と関連して 歴史評論 七五九号 七月

安岡 孝一

タイプライターに魅せられた女たち…エリザベス・マールガレット・ペイター・ロンググリー 三省堂ワードワイズ・ウェブ

四月一日、一八日、二五日、五月二日、九月、一六日、

二三日、三〇日、六月六日、一三日、二〇日、二七日、

七月四日、一一日、一八日、二五日

マイナンバー、その「複雑さ」の真相 日経ITpro

五月一七日、六月一〇日、七月四日、九月、九月一〇日、

十一月六日、十二月一一日

タイプライターに魅せられた女たち…メアリー・オール

三省堂ワードワイズ・ウェブ

八月一日、八日、二二日、二九日、九月五日、一二日、

一九日、二六日、十月三日、一〇日、一七日、二四日、

三十一日、十一月七日、一四日、二二日

A Study of Linguistic Analysis for Classical Chinese Texts. Proceedings 2013 International Conference on Culture and Computing 九月

日本の文字コードの半世紀―国際社会との軋轢を越えて― 歴博 第一八〇号 九月

タイプライターに魅せられた男たち…ジェームズ・デンスモア 三省堂ワードワイズ・ウェブ

十一月二八日、十二月五日、一二日、一九日、二六日、

一月九日、一六日、二三日、三〇日、二月六日、一三日、

二〇日、二七日、三月六日、一三日、二〇日、二七日

拓本文字数据库 石塚晴通編「敦煌学・日本学(続編)」 上海辞書出版社 十一月

翻訳物としての『南伝大藏経』 緊急シンポジウム「近アジ大藏経公開停止・再開問題を通じて人文系学術研究における情報共有の将来を考える」 一月二四日

国際化ドメイン名における「堺」と「界」 東洋学へのコンピュータ利用 第二五回研究セミナー 三月一四日

山 崎 岳

ムラカ王国の勃興——一五世紀初頭のムラユ海域をめぐる国際
関係 中島楽章編『南蛮・紅毛・唐人——一六・一七世紀の
東アジア海域』 思文閣出版 一月

「乍浦・沈荘の役」再考——中国国家博物館所蔵『抗倭図卷』
の虚実にせまる

東京大学史料編纂所研究紀要 二四号 三月

山 室 信 一

イラク開戦10年 現代のことば

京都新聞・夕刊 四月一八日

理想を紡ぎ出す力 小日本 一四号

四月三〇日

国民の声 現代のことば

京都新聞・夕刊 六月一四日

なし崩し改憲 現代のことば

京都新聞・夕刊 八月二九日

「崩憲」への危うい道 世界 八四八号

九月

隠す権利 現代のことば

京都新聞・夕刊 十月二五日

時代の波頭に立つ——徳富蘇峰の思想遍歴と近代日本（講演要
旨） 熊本日新新聞 十二月八日

対亞洲の思想史探索及其視角

台湾東亞文明研究学刊 一〇

卷二期

世界性・総体性・持続性（現代性）という問題性

十二月

図書新聞 一月一日

虹の国 現代のことば

京都新聞・夕刊 一月八日

遠い戦争が生んだ現代世界

京都新聞他（共同通信配信） 一月一〇日

アポリアを問い返す力 徐興慶編『近代東アジアのアポリ
ア』 臺大出版中心 一月

国民国家と国民帝国への眼差し——東アジア人文・社会科学研
究の課題と方法 徐興慶編『近代東アジアのアポリア』

臺大出版中心 一月

空と風と星と 現代のことば 京都新聞・夕刊 二月二七日

橘樸『講座・東アジアの知識人』四卷 有志舎 三月

空間アジアを生み出す力——境界を跨ぐ人々の交流 今西淳子

編『アジアの未来へ』 渥美国際交流財団 三月

人

文

第六一
号

二〇二四年六月三十日

京都大学人文科学研究所発行

共同印刷工業

非売品